

ある日突然中世フランスっぽい世界に

満足な愚者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なあ、一つ話を聞いてくれないか。

『死んだと思ったら中世フランスっぽい世界だった』

——どう思う？

一応、『ある日突然中世フランスに』の続編になりますが、読まずとも楽しめると思います。

作者の力量不足のより誤字脱字が多い可能性がございます。もし、お手数ではなければご報告していただければ大変助かります。

目次

プロローグ	1
第一話	9
第二話	16
第三話	22
第四話	28
第五話	38
第六話	44
第七話	53
第八話	63
第九話	68
第十話	75
第十一話	86
第十二話	96
最終話	103

プロローグ

なあ、少しだけ話を聞いてくれないか？

ある一人の男の少しだけ頭の悪い話だ。

……ああ、悪い。すまん、いきなり、嘘ついてしまった。

“少し”ではなく、“かなり”頭の悪い話だった。

おっと、この流れは幾分か昔に既にやったことが在った気がするな。もし、これを読むアンタがこの流れが二回目だったのなら、悪いことをしたな。許してくれ。ちーつとばかりこちらも混乱しているんだ。

ああ、そうだそうだ、まずは何より話をしないといけなかったな。そこまで時間は取らせるつもりはない。何と言ってもすぐに終わる話だからな、文章に表すなら三行にも満たない話だ。とりあえず、聞いて言ってくれ、

『ある日死んだと思ったら、中世フランスっぽい世界にいた』

どうだ、短いだろうか？　そして、言うまでも無く頭の非常に悪い話だ。

——ああ、頭が悪いのは知っているって？　それは悪かったな。

その病院に行けと言っているアンタ。それは紛うことなき正解だ。俺だって突然そんな話をされたら、そいつの頭の心配をした後に、しかるべき病院を紹介する。もしも、そいつが本当に死んでいるのなら、霊媒師だって呼んでやる。

そもそも、なんだ。中学生の妄想でももう少しまともな話が出来るってものだ。だって、先ず出だしが、“死んだ”と思ったらって何だよ？　あれか、トラックに轢かれたらそこは異世界だったと言うノリか？　そんな妄想と太話、ネットを漁れば幾らでも掃いて捨てるほどあるが、それを実際に言っている奴がいたとすれば、そいつは痛い奴か少しばかり精神を病んでいる奴に違いない。

もしも、周りに実際にそんなことを言っている人間がいるのなら、ソイツとは距離を置くことをお勧めする。

でもな、事実を端的に話すところなるのだからしょうがない。勿

論、俺だって頭の悪い話だって分かっている。でも、それが事実だ。それ以外に話しようはないし、嘘は言っていない。

まあ、もちろんここまで話したら分かると思うが、このある男って言うのは俺のことな。

だから、これは俺の体験談ということになる。

——えっと、それも知ってたって？

それは悪かったな。無駄な時間を取らせた。

閑話休題。

俺の今の状況を端的に表すと、『ある日死んだと思ったら、中世フランスっぽい世界にいた』となるんだ。

それさえ、分かって貰えればそれでいい。とりあえず、与太話の一つとして聞いてくれ。

それはあの日俺が森で目を覚ました時から始まる。

——気が付くとそこは森の中だった。

「——は？」

思わず声が漏れる。そりやそうだ、目の前が真っ白になったと思えば、これだ。声が出るのも仕方がないだろう。

周囲に見えるのは木、木、木。

生ぬるい風が木々の間から吹きこみ俺の髪を撫でる。

自らの恰好を確認してみる。Tシャツに短パン。そして右手にはブラックコーヒーが入ったコンビニのビニール袋。試しに右手と左手を見てみる。右手、左手ともに十本の指がある。どこにも欠けている個所はない。そして大きさも申し分ない。小さくなっていると言うこともなかった。

それに足の指の感覚もある。どうやら全て元通りになっているらしかった。

——これは一体どういうことだ。俺は死んだ。あの日、あの時、あの場所で……確かに。

まさかまたどこかにタイムスリップでも……。

そこまで俺の考えが回った時、

——ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

そんな叫びにも似た咆哮が上から降って来た。

——そうそう、さきほど言い忘れたことがあったな。

フランスっ “ぽい” と言う言葉の意味を伝え忘れていたな。ぽいと言うのは俺が知っているフランスとは違うからだ。まあ、こう見えても色々な深い事情があつて少しばかり、中世フランスには詳しいんだが、ここは俺が知っている中世フランスとは少しばかりことなる点がある。

ちなみにここがフランスだということはこのすぐ後に街を訪れると分かることになるから、置いておいてくれ。

木々の隙間から見えるのは空を飛ぶ、大きな生き物。

大きな羽を飛ばたかせて飛ぶその姿は、どこか荒々しく、どこか神秘的だった。

強度な鱗が体を覆い、巨大で鋭利な爪を持つ、飛行物体。その様子はどこか爬虫類を思い浮かばせる。

そう、俺は知らない。

——ドラゴンが存在するフランスなんて……。

空を飛ぶドラゴンは一匹だけではなかった。ドラゴンに群れをつくる習性があるのか、それともたまたま同じ行動をしていたのか謎だが、空に浮かぶその姿は一匹だけではなく、数匹が同じ方向に飛んでいくのが目に見えた。

ドラゴンね……。

とりあえず、頬をつねっておく。……痛い。

いかん、落ち着け。手元にあるビニールからブラックコーヒーを取り出し、開けて一口。冷たく冷えたコーヒーは苦かった。

しかし、死んだ人間がこうしてまだ生きているのも、可笑しな話だが、ドラゴンがいるとなると、それ以上に可笑しなことが起きているように感じてならない。いや、そもそも俺が生きていること自体が間違えなのか、心臓が動く鼓動や、脈なんてものも確かに感じるが、そ

んな物は全部嘘っぱちで、ここはあの世なのかもしれない。

いや、むしろそっちの方がしつくりくる。あの世ならば、ドラゴンやら変な空想上の生き物がいても可笑しくはないだろう。

——にしても、あの世と言うのは、意外と地球に近いのな。

この木々を見ているとドンレミの村で見慣れた木々と同じに見えるし、吹く風も、運ばれて来る花の匂いも俺が知っているままだ。

——ここが天国か地獄かそれは知らんが、意外にあの世と言うのは俗っぽいのかもなあ……。

そんな暢気な考えを俺が浮かべていた時だった。

「ギャアアアアアアア！」

悲鳴が聞こえた。

聞こえて来た方角は先ほどドラゴンが飛んで行った方向。

悲鳴、ドラゴン。この二つのヒントから導き出される答えは——

「——急ぐか」

俺は悲鳴が聞こえた方角に足を進めた。

悲鳴の聞こえた先には町があった。白い城壁に囲まれた町は見慣れたフランスの町であり、もう見る事が出来ないと思っていたものだった。出来ることなら郷愁にかられたいのだが、どうやらそうする暇はなさそうだ。

町は所々で火の手が上がっていた。モクモクと青空に登る煙があらちらこちらに見える。

そして空には数匹のドラゴン。そして、壁の外のことまで聞こえる悲鳴と戦闘音。

「——っ」

どうやら予想通りただ事では無いようだ。

幸いに空いていた門から中に入る。町の中は、酷い有様だった。崩壊した家屋もあれば、燃えている建物もある。どこからか銃声が聞こえ、叫び声と助けを求める声が上がっていた。

「だ、誰か助けて！」

そして、子供を抱え走る母親がこちらに走ってくるのが見えた。その後ろにはドラゴン。

「——くっ！」

慌てて、何か武器になるような物はないか探す。

——ええいもう、とりあえずこれだ。

丁度右手に持っていた缶コーヒーをドラゴンに向かってぶん投げる。一口しか飲んでいないため、まだ結構な質量をもったそれは、綺麗な放物線を描きながら、

「ギャオ!？」

——すつぽりとドラゴンの口の中に納まった。

自分でもびっくりするような、ナイスコントロールだ。

某コンビニで買った120円の有名銘柄の缶コーヒーがドラゴンさんのお口に合ったのか、それとも合わなかったのか、それはドラゴンの言葉を理解できない俺には分からない。それは分からなかったが、俺が投げた缶コーヒーによって——

ドラゴンと目が合う。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

——ドラゴンさんの標的が俺になったのは間違いないようだ。

ドラゴンは咆哮を上げると、翼を羽ばたかせこちらに接近してくる。そのスピードは速い。

俺に敵意が向いたのは嬉しいことだが、いかんせんこちらは丸腰だ。ドラゴンのあの鋭利な牙と、大きな爪が飾り物ならいいなら、そういうことはないだろう。

——とりあえず！

横にあった廃屋から適当に木の棒を引っ張り抜く。

そして一閃。

横振りの一閃はドラゴンの頭に当たる。

——ボキ。

え……？

嫌な音がした。恐る恐る見てみると、俺の即席の武器は根元からぽつきりと折れていた。

「……嘘だろ？」

流石ドラゴンさんだ。防御力もさすがのもので、木の棒程度では太刀打ちできないらしい。ドラゴンはひのきの棒では倒せない。一つ勉強になったな。これは俺の実体験なのでぜひ、これを読んでいる奴らも、ドラゴンと戦う時が来たら参考にしてほしい。

俺の攻撃何て蚊に刺された程度の痛みもないのか、ドラゴンは大きな口を開け、こちらに噛みつこうとする。

その動作は速い。

「——つちー！」

しかし、目で追える範囲だ。戦場を飛んでくる矢よりも遅いし、数も多くない。

偶然の要素が強かったにしろ、あの地獄を何度も生き残って来た俺だ、この程度躲すのに苦労はしない。

噛みつかれる前に半身になり、ドラゴンの軌道上から避けると、躲すついでとばかりに右手を握り、上からその頭を叩いてみる。

棒で殴ると棒が折れたんだ。そんな防御力をもつドラゴンを殴った所でダメージは与えられるはずもないのだが、とりあえず、次の一撃を躲すための布石になればいい。

俺はそんなことを思っていたのだが……。

——ドコオツ!!

そんな鈍い音を上げてドラゴンが地面に沈む。地面はへこんでいた。

「……は？」

思わず口から声が漏れる。

眼下には目を回して伸びているドラゴンとその下にはひび割れた

地面。

——どうということだ？

ドラゴンが打撃に弱かった？ ——いやいや、木の棒に殴ったのにピンピンしてたんだ。その可能性は薄い。

たまたま急所に当たった？ ——その可能性はなくもないが、急所にあたって倒れたとしても地面がへこむか？

この二つが違うとなると……まさか。

「ギャオオオオオオ！」

背後から聞こえる叫び声、後ろを向けばさらに一体のドラゴンが空にいた。

——考えるのは後か、とりあえず今はアイツを追い払うことが先決か。

ドラゴンと向き合う。仲間をやられて怒っているのかどうかは分からないが、ドラゴンは二、三回大きく羽ばたくと、大きく息を吸い込んだ。

——え？ まさか火とか吐けるのか？

肺が大きく膨らみ、口元にチラチラと火の粉が見えればそれはもう間違いない。奴らは火を噴く。

そして火なんて噴かれた日には丸焦げになること間違いなしだ。いや、丸焦げなら一回なっているんだが、二度目は勘弁だ。基本的に一度も二度も一緒と言う考えで人生生きてきたが、丸焦げは違う。

俺がつぶれた廃屋の下に退避しようとした時だった。

——シユン。

そんな風切り音が聞こえてきたと思えば、空に浮かぶドラゴンの頭に一本の剣が刺さっていた。

そして、ドサリと乾いた音を立てながら地面に落ちるドラゴン。

「いや、隊長！ さすがな投擲です！」

「だから、俺は隊長じゃなくて副隊長だって言ってるんだろ」

「で、でも、隊長が一番上じゃないですか！」

「お前は入ったばかりで知らないかも知れないが、俺たちの隊長は一

人しかいないんだよ。そして、それは俺じゃない。俺が隊長なんて恐れ多い」

「で、でも、その隊長は……」

「それよりも、ここで終わりか？」

「はい、ここで終わりです」

そんな会話が聞こえて来た。声の方角を向けば、二人の男がこちらに歩いてくるのが目に入った。

「黒目黒髪、そうだな隊長はそんな容姿だったよ……」

「有名ですもんね黒目黒髪の悪魔って」

歩いてくる二人の顔が徐々に見えてくる。

一人の男は、若い男。まだ少年と言っても良い位の見た目だった。

「生きてるか？ アンタ、災難だったな」

そして、もう一人は……。スキンヘッドに、まるで睨み付けるような目つき。そして額からは一本の切り傷が鼻の横を通り頬まで伸びていた。どこからどう見ても真面じゃない。どうみてもその筋の間だ。普段街中で見ても絶対に関わりたくない人だった。

——まさか……。

「——た、隊長!？」

俺が何か言うよりも先に向こうが大声を上げた。

そう彼こそが俺が隊長を務めていた隊の副隊長であり、戦場で最も長い付き合いがある男だった。

ドラゴンがいたかと思えば、生きているはずの部下もいる。そして、俺はあの時死んだはずなのに、未だこうして動いている。

色々わけの分からない状況だが、一つだけはつきりと分かることがある。

——缶コーヒーもつたいなかつたなあ……。

一口飲んでしまった分、そのショックは一入だった。

第一話

「お前らよく聞け！ 何とあの『不死』の隊長が地獄の淵より戻られた！ やはり、隊長は『不死』に違いねええ！ 最近は竜やら、骸骨の兵隊やら、ゾンビやらが我が物顔で歩いているが、隊長が戻って来たからにはもう心配要らねええ！ 現に見て見ろ！ あの竜を隊長は一撃！ しかも、ただ殴っただけで地に沈めた！ まるで、鬼神！ まるで、悪魔！ これより俺たちの勝利は既に決まったも同然だ！ まあ、そんなことは置いておいて、とりあえず飲むぞ！ 野郎ども！ ジョッキの準備は良いか？ 憎つくき竜の肉で作ったつまみの用意は万端か？ ——行くぞ！ お前ら！ 酒の貯蔵は十分か？」

「それでは、隊長の帰還を祝い！ 乾杯！」

「乾杯!!」

青空の下、その掛け声とともに各々が手に持つ、ジョッキを天に掲げる。

何時にもなく突然始まった飲み会は、街の殆どが破壊されているため、こうして青空の下外で行われていることになった。俺としては急に始まった飲み会に未だに少しだけ戸惑っている。

何と言つても元副隊長から、現状について少しだけ話を聞いた後、俺がその情報を整理する前に、

『じゃあ、隊長が帰って来た祝いに飲みましようか？ ああ、既に準備はさせておきますので、すぐにでも始められますよ。いや、むしろ皆早く飲みたいと待ちきれません！ 隊長がいなくなつてとりあえず、禁酒令を出しておりましたので、皆アルコールが抜けて最近では手が震えるんですよ、ガハハハハハ』

と大声で笑いながら連れてこれたのがここだったのだ。

何が『じゃあ』かよく分からないし、今までの彼らの言動をまとめると、アル中だから早く酒が飲みたいだけのように取れなくもない。いや、間違いなく、その線が強そうだ。

とりあえず、今の内に元副隊長だった彼から聞いた情報をまとめおきたい。

俺とジャンヌが処刑されて、数日後、オルレアンに「竜の魔女」を名乗る者が現れた。

その竜の魔女は名の通り竜を操り、オルレアンを破壊し始めた。オルレアンにいたシャルル7世は竜の魔女に殺された。シャルル7世が竜の魔女に殺されたところを見ている部下がいるのでその情報に間違いはない。

竜の魔女によって操られた竜たちによってフランス各地が襲われている。

竜の魔女は竜だけでなく、骸骨で出来た兵隊、骸骨兵も操る。

このように竜に襲われて滅んだ村も多く、襲われて死んでしまった人の中には死人になったとしてもゾンビになって甦り、さらに人々を襲う人達もいる。

イングランド軍は当の昔に撤退している。

竜の魔女に対抗している勢力は今のところ二つ。一つは副隊長が率いる、通称悪魔の軍（この悪魔の軍というネーミングは全員があつまり満場一致で決まったそうさ。お前ら、もう少しマシな名前はなかったのかと小一時間は問い詰めたところだが、そんな時間もなかったため、諦めた）と、フランス正規軍。フランス正規軍の方はあのジル・ド・レエ卿が率いているそうさ。

とりあえず、まとめてはみたが見れば見るだけ、よく分からん。

先ず何だ、この竜とか骸骨兵やというファンタジー小説そのままの奴らは……これだけでも、頭が痛いと言うのに死人が生き返ってゾンビになって人々を襲うと来た。もう、こうなれば頭痛を通り越して笑うしかない……。

ん？ そもそも、俺もそう言えば甦った人間となるのか……。いかに、これ以上考えると頭がパンクしそうさ。

とにもかくにも、だ。現に竜がいることは俺も知っている。と言うことは、彼の言う通り、ゾンビも、骸骨兵もいるのだろう。元より可笑しな世界ということは分かっていた。実際にいるのなら、それがドラゴンだろうと、骸骨兵だろうが、ゾンビだろうが受け入れるよりしょうがない。

——それよりも、だ。俺が重要視するべきことは……。

「なあ、隊長飲んでいるか？」

「まあな、そして何度も言うようにもう俺は隊長じゃない。あの隊は戦争が終わった後に解体された筈だ」

「何言っているんですか！ 俺たちの隊は不滅ですよ！ そして、この隊の隊長は貴方しかいない！ 俺には副隊長が似合っています！

まあ、そんなことより、まずは飲みましょう！ さあ、グイツとー！

「分かった分かった。飲むからもう一度だけ、聞いてもいいか」

「ええ、なんですか？」

——竜の魔女の正体。それが、

「竜の魔女がその——聖女だっていうことは本当か？」

「ええ、その通りです。俺の部下も、そして俺自身もオルレアンで、真っ黒に染まった聖女、ジャンヌダルクが竜の魔女と自ら宣言し、人々に襲い掛かる姿を……」

俺の問いかけに彼は、アルコールにより、少し朱に染まった笑顔を、真面目に正すと、頷く。

その表情はとても真剣で、とても冗談を言っている色ではなかった。

「……………」

「隊長、信じられないかもしれませんが、これは本当の話です。聖女、いやあれはもう魔女か。魔女は俺たちと隊長が文字通りこの身を賭して守ったフランスと言う国を滅ぼすつもりです……」

俺に出来るのは、どの時でも、どの世界でも同じ、〃あるべきこと〃をあるべきままに受け入れる〃ことと、〃その受け入れたことの中で、自らが何をどうしたいのか、選び取る事〃。

選択肢は何時だつて少ない。

彼の話が本当なら、今回に限ってはどの道を選んだ方がいいのか、なんて分り切ったことだ。正解の道は分かっている。でも、俺がその道を選びとるのには、少しの時間があるようだった。

「……………そして、その竜の魔女はオルレアンにいます……」

「ええ、その通りです。彼女は今オルレアンに本拠地を構えています」

「そうか……」

ジャンヌ……君は本当に自らの意思でこの選択を選び取ったのか……？

俺の疑問に答える人は、誰もいなかった。

「ところで、人数が少ないように思えるが、どうかしたのか？」

見てみると、大空の下で酒を笑顔で煽っている男たちは十人にも満たない。先ほどの青年以外は見知った顔だ。元の俺の隊の隊員で間違いない。しかし、どう見てもその数が少ない。

「ああ、それですか」

元副隊長——いや、もう面倒なので、副隊長にする。——は、先ほど仕留めたドラゴンの肉を豪快に齧りながら、

「隊長がいない間、あの馬鹿どもの指揮は不肖ながら俺がとっておりまして、それで、他の奴らには情報収集と、出来れば敵の排斥や撲滅を命令して皆各地に潜んでます。情報は命なので」

「なるほど……。でも、排斥や撲滅って言っても大丈夫なのか、竜とかが相手だろ？」

「ああ、そういう事ですか。確かに竜は多少厄介ではありますが、多数で囲めばそこまでの苦労はしません。骸骨兵やゾンビは見た目がグロイですが、俺たちにして見れば苦労する相手ではありません」

そう言つて豪快に笑う彼は、ジョッキの中身を一気に煽る。何とも豪快で何とも男らしいやつだ。そう言われてみればコイツに限って言えばさつきもドラゴン相手に剣を投擲して倒していたな。

この副隊長並みに強い奴はいないにしても、やはり軍隊でしかも、あの地獄を生き残った奴らだけあって一癖も二癖もある人間だ。竜やら骸骨兵やらゾンビやら、そんな空想上の敵が相手とはいえそうそう遅れをとる様には思えん。

——しかし、だ。

そう考えると気になることがある。

「しかし、竜の相手も骸骨兵の相手も出来るならなんでフランスはここまで滅びる一歩手前の段階になっているんだ？ ジル・ド・レエ卿が率いるフランス正規軍と手を組めばオルレアンまで攻め込むこと

は無理でもここまで街がボロボロになることも……」

「何言っているんですか、隊長！ 隊長の命令なら兎も角、何で俺たちがあのいい子ちゃん達と手を組まないといけないんですか、あんな甘ちゃん連中と手なんて組んだら、虫唾と鳥肌が両方走って偉いことになりませう！」

ああ、そうだった。こいつ等と正規軍が馬の合うはずがなかったな。

まあ、もとより俺たちは正規軍の壁となる隊だし、その正規軍は半ば俺たちの事をゴミを見る目で見ていたもんな。素行も悪いし、口も悪いし、すぐ手を出すこいつ等も悪いと言えば悪いのだが、お互いつもりに積もったものがあるだろう。

そうでなくても、あの清廉潔白なジル・ド・レエ卿の軍隊となれば、ウチの素行最悪、品位の欠片も何もない隊とは折り合いが付かないのは手に取る様に分かる。

「そうだったな……それで、何でここまで攻め込まれた。やはり数か？」

「それについてなんですけど、無尽蔵に襲ってくる数も確かにやっかいなんですけど……それ以上に」

彼には珍しく言い澀む。

「それ以上に……？」

「尋常じゃないくらい強い奴らが向こうにいまして……。それで面目ない話ですが、何度か命からがら逃げだすのが精一杯な時も……」

「竜をも恐れないお前らが太刀打ちできないとなるとどんな化け物だ……？」

本物の悪魔や神やらが出てきてももう何も可笑しくないような気がする。

「いえ……それが、人間なんですよ。少なくとも見た目は」

「……人間？」

「ええ、人間です」

「まさか、竜の魔女か？」

「確かに竜の魔女も化けもんです。オレ達じゃ五万といたところでや

られるでしょう。でも、竜の魔女以外にいるんです。とんでもない化けもんが……。俺は今まで一対一で負けるような相手はいないとばかり思っていました。戦場で矢や砲弾にやられようとも、数の暴力に膝を着こうとも、不意打ちで額に傷を負おうとも、一対一ではどこの誰にも負けない自信があつたんですが……。あいつらは別です。別格です。勝ち筋どころか引き分けに至る道すら見えなかつた。隊長から隊を引き継いだと言うのにふがいねえ……」

下手な慰めも下手な擁護もしない。時にそれは命よりも大切なプライドを傷つけることになるから……。

「……。そうか、そんな奴らがいたのか……。それで、そいつ——」
そいつらつてどんな奴らなんだ、と聞こうとしたのだが、俺の口からそのセリフが出ることはなかつた。

何てことはない俺の言葉を遮る様に、自称見張り番の男が大声を上げたからだ。

思えば、これは所謂フラグと呼ばれるものだったのだろうか？ 俺のさきほどの疑問はすぐに解決することになる。

「——敵襲だあ！ ドラゴンが4！」

一応形だけ残つた見張り台で、酒のジョッキをグビグビと煽っていた彼の顔は真っ赤だ。明らかに酔っている。ドラゴンの数は少しばかり信用できないが、敵襲なのは、本当だろう。

しかし、だ。

「何だ、ドラゴンか……。それも4匹じゃなあ……。半分も対処に当たれば十分だな」

「よし、じゃんけんでもするか……。負けた奴がドラゴン刈りな」

「それいいな。最悪一匹は仕留めてくるようにな、ツマミが少なくなつて来たし、それに隊長の分が少ない」

「じゃあ、一番肉付きが良い奴を逃がせねえな……」

「別に全部狩ってしまったっても構わんのだろ？」

下の野郎たちはこのようにぐだっていた。竜の襲撃が毎度のこと
で飽きたのか、それともただの竜であれば対処するに事足りないの

か。いやきつと両方だろうな。

とりあえず、緊張感の欠片も無く、各自が渋々といった感じで弓や剣など自分の得物の準備をしている。

俺の横で真っ赤な顔をしている副隊長もそうだ。

「隊長、ゆっくり座っておいてください。ドラゴンの4匹くらい下の者でも数で囲めばやられる心配はありません。それにしてもアイツはなんで、そんなに慌てるんだ？ ドラゴンの4体くらいなら何時ものことじゃねえか……」

そんな余裕を見せていた隊員たちだが、見張りの彼の次の一言で、「——違うそうじゃない！ ドラゴンの上に人影が見える。数は一。でも間違いないえ！ あいつらだ！」

——刹那、場の雰囲気が変わった。

第二話

——刹那、場の雰囲気が変わった。

「テメエラー！慌てるんじゃない！ とりあえず、戦闘員ではない奴らは逃げろ。そして、その他の人間も基本的に戦闘は避ける。ドラゴンも角奴らと戦闘は避ける。いいか、これは俺からの命令だ！」

「Oui, mon sieur (了解しました)!!!」

副隊長の叫び声に似た号令が響き渡ると、彼らは一斉に返事をし、各々の武器を手に取り、急いで戦闘と逃走の準備を始める。

「すみません、隊長。隊長の眼前で俺みたいな三下が命令を飛ばすだなんて……。でも、奴らは本当にやばいんです。罰は受ける所存です。だから、今回だけは……」

「いい。気にするな。それにしても、俺もどんな奴がくるか見てみたい」

先ほどのドラゴンとの戦闘の時から少しばかり疑問に思っていたことがあった。それを確認したいし、そして何よりも部下が逃げ切るまでは時間を稼がないといけない。

各自が非常に素早く動いたおかげでそいつらが来た時にはすでに俺と副隊長から以外はこの場に見える人間はいなかった。

ソイツは竜の背に乗りながらやって来た。

「へえー、送ったドラゴンの反応がなくなったから何かと思ったら、やっぱり君たちか……。悪魔の軍、副隊長さん」

ドラゴンはゆっくりと下降して、地面に着地する。

ツバの大きな青いハットに、白い男性物の群服。そして、右手にはレイピアを持つその姿は、可憐であり、それが一つの芸術と呼んでも問題ないほど、整っていた。

男装の麗人と言えいいのか、いや、もとより、男なのかもしれない。整った顔に、長い髪は美女にも、美男子にも見えた。とりあえず、言えるのはその人物は美しかった。

しかし、だ。その人物を見た時、俺の体のどこかが、体中に警鐘を鳴らす。

——ヤバい。コイツはヤバい。

脳が、心が、そして本能が、そいつのヤバさを俺に伝える。

戦場ですらそうそうなかつた。そいつは俺たちに死を思い出させた。

「覚えていてくれたのか？　こんな美人さんに覚えてもらえるなんて、男冥利に尽きるねえ……」

「一度逃した首は、忘れないのさ。そして、そちらの人物はどちらさんだい？」

「はっ、聞いて驚け！　こちらの人物は俺たちの隊の隊長！　この悪魔の軍、隊長であり、『不死』の二文字を背負う男だ」

「……へえ、私は知らないけど、結構有名な人なんだね。覚えておくよ」

「何？　隊長を知らないだと？　どんなモグリだお前、それだけ腕の立つなら何処かの軍人だと思うが、隊長の名前を知らないだと？　お前らの上司、竜の魔女の師であり、『不死』の二つ名をもつ隊長だぞ」

副隊長のその言葉に、そいつは顎を手に当て考えるそぶりを見せる。

「ジャンヌダルクの師匠だと……そんな人物であれば僕が知らない筈はないが……つく、狂化された影響か考えがまとまらない」

ソイツはブツブツと何か独り言をつぶやいたと思えば、急に顔を上げる。その瞳には狂気の二文字が見えた。

「——まあ、いいや彼が何であれ、関係ないか。ここで、副隊長も君も死ぬんだから、ね」

——やばい来る。

「——おい、俺の剣、まだ持っているか？」

「すみません、返すのが遅れました。これです！」

そう言つて副隊長は腰に吊るしてあつた剣を俺に投げる。長年使い越した剣であり、何の種も仕掛けも無い普通の一兵に配られたただの剣。切れ味も、そこまで良くはなく、長さも普通。特徴なんてどこにもない、ただの西洋剣。

でも、それを受け取った瞬間、それが手にしつくりと馴染んだ。

これが、俺の武器なんだと本能が告げた。

「——っちー！」

弾丸のように突っ込んできたそいつと打ち合う。しかし、その勢いを受け止めるにはまるで足りずに後ろに吹き飛ばされる。

「驚いた。その剣ごと叩き折るつもりだったと言うのに……まさか、サーヴァントだとはね。いや、サーヴァントなのか、キミは？」

「人を召使い（サーヴァント）呼ばわりだとは、いただけないな。いきなり切り掛かってきて、それはないだろ」

「なるほど、君自身も自分が何なのか分かっていないという訳だね。まあ、いい。君が何であれ、ここで討つことには違いない」

再び弾丸のようなスピードでこちらに向かってくる。

——力では勝てない。

さきほどの一太刀で分かった。コイツの方が力は圧倒的に強い。それさえ分かれば十分だ。

「——っ」

横からの一閃。その次は突き。そして、左からの薙ぎ払い。

その全てをいなす様に立ち回る。真面から打ち合えば、確実に負ける。なら、まともに打ち合わなければいい。

攻撃をいなし、力を拡散させる。

あの地獄で攻める剣技を磨く機会はなかったが、受ける剣技なら……きつとこのフランスでは誰にも負けない。

さきほどから思っていたことへの答えは出た。何の因果か分からんが、俺は生前よりも力が増しているようだ。

「驚いた。まるで、歯ごたえがない。水を切っているような感じだ……。実戦にて培われた見事な剣技だ」

数回打ち合うとそいつは顔を驚愕にそめて、バックステップにて大きく距離をとった。

数度の打ち合いで十分分かった。確かにコイツは強敵ではあるが、一人だけなら十分に相手を出来る。『勝てる』ことはなくても『負ける』ことはない。

——しかし、だ。

問題は別にある。

目線をソイツから少しずらせば副隊長の姿が見えた。彼を巻き込むことは避けたい。

今の立ち位置的にアイツの方が副隊長に近い。狙われれば……。

「彼が心配かい？ うふふふ、なら一つ約束しよう。僕はただの“見物人”には手出しをしないってね。なに、ここまで僕と打ち合える人間は珍しいから。そのお礼とでも思ってくれればいいよ」

俺の視線に気づいたのか、そいつは笑う。男だろうと女だろうと惚れてしまいそうな魅力がそこにはあった。

——見物人には手出しをしない。

この条件は確かに俺にとつては破格の条件だ。その瞳を狂気に染めてはいるが、まだどうにか理性はあるようだし、そいつが本当に自らが言ったことを守るのなら俺にとつてこれほど有り難いことはない。

でも、だ。

それはあくまでも見物人には手出しをしないというだけであり、ソイツが見物人ではなくなれば、手を出すということである。

俺が隊長を務めた隊は社会につまはじきされた奴らの寄せ集めだ。意地やプライド、そして人情で生きている人間ばかりだ。そんな隊に所属する人間に、“君は弱いから、何もしなければ助けてあげる”なんて小ばかにしたことを言うとうどうなるか

「て、ためええええええええええ！」

——そう、怒るよな、お前は。怒らざるを得ないよな。

副隊長は手に短剣を大きく振り上げて、ソイツに……。

「——待て！」

その動きを止める。他の誰でもない、俺だからこそ出来ること。

「た、隊長！」

目が合う。

長い付き合いだ、それだけでもう言葉は要らない。

「これは、隊長命令だ。副隊長、ここで死ぬことは許さん！ 生き延び

ろ！」

「しか——」

「誰が言い訳を許した！ 返事は！」

「Oui, mon sieur (了解しました)！」

「お前は、これより隊員を集めて、安全なところまで皆を避難させる！」

お前らも、すぐに動け！ これは隊長命令だ。返事は要らん！ 急いで行動に起こせ！」

物陰に待機して、機会を窺っている彼らにも聞こえるように大声を飛ばす。戦場では大声を常に上げていたし、声は何時の間にか大きくなっていった。

「へえ、殺意に染まった人間を言葉一つで止めるか……よほど部下に慕われているようだね」

「お世辞は有り難く受け取っておくよ」

ソイツは感心したようにうなずくと、

「見物人には手出しをしないと誓ったからね。彼が僕を攻撃しない限り、何処に行こうと僕はかかわらない。でも、しまったなあ、また逃したとなると何て言われることやら……」

ソイツはもう副隊長の方を見ずに、俺と向き合う。

「それじゃあ、ギアを一つ上げさせて貰うよ」

あれでまだ本気じゃなかったのか……。

腰を深く落とすとそいつはまた俺に向かって突っ込んできた。

「隊長ご武運を！」

その隙を逃さず副隊長は駆けだす。

うん、それでいい。

——今はまだ、こいつらに俺たちの手の内を見せる必要はない。

「ハアア！」

叫び声とともに心臓めがけ突きが飛んでくる。速さも鋭さも先ほどよりも上がっている。

どうやら、本気ではなかったことは本当のようだ。本当に化け物かよ……。

——チッ！

舌打ちと共に半身になって躲す。
横からの一閃。

剣で受け止め、その勢いをそのままに後ろに飛ぶ。
相手はそれを予想していたのか、こちらに突っ込んで来る。

——そして、上段からの一撃。

しかし、俺が予想した攻撃が来ることはなかった。

俺たちを止めたのは空から降ってくる声。

「あらあら、誰がこの男を逃していいと言ったのかしら、セイバー？」
その声を聞いた第一印象は冷たくもあり、そして熱くもあるといった矛盾を感じた。心の底から、出てくる全ての物を軽蔑した冷めたさに、憤怒や恨みなどの熱を混ぜ合わせた様な、そんな印象を受けた。
その声を受けて、打ち合っていた剣が止まった。

「何か言ったらどうなの？ 貴方は二度も獲物を逃がすのかしら？」
それともなに、サーヴァントでも見つけたのかしら？」

ソイツは空から竜に乗り降りて来た。竜の大きさは、さきほど襲ってきた奴らよりも一回り大きい。

そしてソイツは降り立つ。

彼女と目が合った。

「——っ」

息を飲んだのは、どちらだったのだろうか。彼女なのか、それとも、俺なのか。いや、お互いだったに違いない。

この世の全てを染めるような真っ黒な衣装に、色素が抜けきったような銀の髪。瞳は全てを炎に染めんとするする憤怒に染まり、そして手には漆黒の旗を掲げていた。旗には大きな竜の印。

全てあの時の彼女とは違う。でも、俺には分かる。

彼女は間違いない。風貌は違う、見た目も違う。

何もかもが違う。

でも、俺には分かる。ずっと、彼女の傍にいた俺は分かる。

そう、彼女は間違いない

——ジャンヌダルク、その人だ。

第三話

彼女の黄金に輝く瞳と目が合う。

沈黙が流れたのはどのくらいだっただろう。

——それは一秒にも、十秒にも、そして、十分にも永遠にも感じた。いや、実際のところ、そこまでの時間は流れていないのかもしれない。

しかし、俺にはその時間が、長くも短くも感じた。彼女は小さく、口を動かす。

その口から洩れた言葉は、風に流され誰の耳にも届くことがなく宙に溶けて消えた。

「久しぶりだな。しばらく、見ない内に随分と変わったもんだ」

黒く染まった彼女に声を掛ける。あの純白な彼女とは何もかもが正反対だった。

この世の全てを燃やし尽くさんと、憎悪によって燃える瞳に、漆黒に染まった衣装、漆黒に染まるは、服だけでなく、彼女の代名詞と言えるあの純白の旗でさえも、黒く染まっている。

そして、あの長くて癖のない純金のような美しい髪は、色素がなくなり、銀色に変わり、そして大幅に短くなっていた。よく見れば身に纏う衣装も隅の方がまるで燃えた後の様にボロボロになっていた。

「まさか、今更あなたが召喚されるなんてね……。いえ、寧ろここまでなったから召喚されたのかしら……。まあ、どちらでも良いわ。久しぶりね、まさかお互いこんな所で顔を合わせるなんてね」

その声はあの時の璆鏘琳瑯としてなるような声ではなく、体の芯まで凍り付きそうな、憤怒と嫉妬、そして憎しみに満ちた声だった。

「召喚……。？ 何言ってるんだ、お前？ 何か知っているのなら教えてくれないか。こちらら、死んだと思ったら急にこんな世界で右も左も分からないんだよ」

俺の言葉に、彼女は右手を顎に当て何かを考えるようなそぶりを見

せる。

「……自分の状況が分かっていない？ ……聖杯による不完全なサーヴァント召喚？ いや、そうよね、考えてみれば当たり前のことよね。完全なサーヴァントとして召喚されるはずがないもの。いえ、寧ろ貴方はサーヴァントと言うくくりに入るのかしら？」

「何をブツブツ言ってるのか知らないが、お前も俺を召使い（サーヴァント）呼ばわりか？ 確かにあのドンレミの村では、お前の世話を色々と焼いた覚えがあるが、流石に召使い（サーヴァント）呼ばわりは感心しないな」

俺的には召使いというよりも、兄のような感じで接してきたつもりだったのだが、内心で召使いと思われていたのなら甚だ心外である。

「うるさい！ そういう事じゃないの！」

俺の言葉を彼女は顔を赤く染めながら大きな声で否定する。

あつ、今の彼女は、昔のジャンヌのまんまだな。それに髪も短くなったし、何となく彼女の幼少期を思い出す。

「あつ……げふんげふん！ 今のはなしよ！」

普段のイメージとは違うのか、先ほどの剣士が驚いた視線を黒いジャンヌに向ける。見られていたのに気づいたのか、黒いジャンヌは咳ばらいをして、

「とりあえず、アナタが自分の置かれている状況が分かっていないというのなら、私からは言うことはないわ！」

と仕切り直した。ちなみにその頬は未だに朱に染まっているのと言うまでもない。

昔から思っていたがジャンヌって俺が居ると締まらない奴だなあ……。

彼女の苦し紛れの言い訳に似たフォローが成功したのかしているのか、それは今は置いておこう。

彼女が言うつもりがないと、言うのなら彼女は言わないだろう。それなら、俺は別に聞きたいことがあった。どうせ、俺自身の状況は他の誰でもない、自分自身が一番知っているし、この情報がなくても俺がすべきこと、彼女——竜の魔女に聞かなければならないこと

は決まっている。

「じゃあ別に聞きたいことがある」

「何で私がアナタの質問に答えなければいけないのかしら？」

「ここで、会ったのも何かの縁だろ。それに、聞きたいことといっても簡単に単純なことさ。君なら分かるだろ？ 俺が聞きたいことと言っているが……」

「——分かったわ。少しだけアナタの茶番に付き合っ上げて上げる」

「お前が、竜の魔女で間違いないか？」

俺の問いかけに彼女は真っ直ぐに応える。

「ええ、私が竜の魔女よ」

「それじゃあ、君の目的は？」

「このフランスと言う国の滅亡」

——その瞳に迷いはない。

「その理由は復讐か？」

「……ええ、私と貴方を殺したフランスへの復讐よ！ 主の声はもう聞こえない。それは、フランスと言う国を主が見限ったから、だから私はこの国を滅ぼす。主の代わりに鉄槌を下し、貴方と私の憎悪を持ってフランスと言う国を炎に包む！」

——その瞳は小さく揺れた。しかし、その瞳の奥にある芯はぶれていない。

「そうか……では、そのフランスを滅ぼすという行為は君自身だけの為か？」

「——ええ」

——彼女の瞳は……。

「じゃあ、最後に一つだけ。これが一番聞きかったことだ。——フランスを滅ぼすというのは君が、君自身が望んで選んだのか……？」

「もちろんよ」

彼女のそのセリフは今までの問答の中で一番本心から出たセリフだった。かれこれ、彼女との付き合いは長い。お互いに嘘は通用しない。それは彼女の姿が変わり果てても同じようだった。きつと、彼女

にも俺の嘘は通用しないだろう。

「フランスを滅ぼすのは私の心の底からの願望よ。それを聞いて貴方はどうすると言うのかしら？」

「君なら分かるだろう？ 俺がなんて言うかなんて」

そう、お互いに相手の事を知り尽くした俺たちなら。俺の内心を考えを一番よく知る彼女なら、俺の口から出るセリフが分かるはずだ。

「—— 君がそれでいいならそれでいい」

俺の答えはそのセリフを於て他に無い。

「——っ」

小さく息を飲む音が聞こえた。彼女の顔には、納得として不服といった相反する矛盾する言葉が浮かび、そして少量の動揺の色が浮かんでいた。

「質問は以上だ」

「じゃあ、私からも一つだけ言わせて貰うわ。ねえ、私の下に来ない？ アナタと私が手を組めば、簡単にフランスを滅ぼせる。今、邪魔をしているあの白いのだって、他の有象無象のサーヴァントだって敵ではなくなる。ねえ、フランスと言う国と一緒に滅ぼさない？ だって、あの時処刑されなければ私とアナタは……」

「その答えも別に聞かなくても分かっているだろ？ 君がフランスを滅ぼすのに深い事情があることは分かった。その気持ちに憤怒であれ、憎しみであれ、嫉妬であれ、それを君が選んだのなら、俺は否定しない。君がそれでいいならそれでいい。でも、君の選択を否定しない代わりに俺も選択肢の中から自分の選択を選ばせて貰う」

「俺は他ならない自分自身の意思で持つて君のその活動を止めさせて貰う」

彼女が彼女の意思で道を選んだように、俺は俺の意思をもって道を選ばせてもらう。ただ、それだけの話だ。

「——そう、やっぱりアナタはそう言うと思っていたわ……」

彼女はそう薄く笑うと、

「セイバー撤退よ」

そう、彼女の横に立ちレイピアをその右手に構えていた人物に声を

掛けた。

「しかし、彼をここで討たなくていいのですか？」

「彼は特別よ。他の有象無象はサーヴァントも含め殺して構わないけど、彼だけはなるべく生かして捕らえたい」

「でしたら、彼が一人にいる今がチャンスでは？　こちらはマスターも含め二人のサーヴァントがいます。彼が幾ら柔の剣技の使い手でも二人がかりなら……」

「いいえ、彼の力と知名度を考えるとサーヴァント二人で生け捕りは厳しいわ。今の〃知名度と伝承を考えれば、仕留めるのにサーヴァントが三人、生け捕りにしようと思えばもう一人は確実にいるわね」
「——なっ！　そこまで、彼には知名度が……」

「そうね、知名度だけなら、私以上はないとしても、同等程度にはあるでしょうね」

「それだけの知名度がある英霊なら、私が知らない筈は……」

男とも女とも、美少女とも、美男子ともとれる彼女は少し焦ったような声色を出す。

「セイバーそこまでよ。彼とここで打ち合っても〃勝ち〃はしないし、〃負け〃もしない。千日手のまま日が暮れるわ。だから、今日は引く。マスターの言葉が聞けないのかしら……」

「いえ、そういう事でしたら、マスターの御意思に従います」

「そういうことだから、私達は一度引くわ。私はアナタがこちらについてくれるならいつでも大歓迎だから……でも、もしも、気持ちが変わらないようであれば、次からは、私とアナタは……」

「ああ、そうだな——敵同士だ」

彼女は俺の言葉に小さく頷くと竜に跨る。横に立っていたセイバーと呼ばれた騎士も同様に竜に跨る。

この日初めて俺と彼女は敵同士になった。

竜に跨った騎士がこちらを向き口を開く。

「すまない、名乗るのが遅れた。私の名はシユヴァリエ・デオン！　覚えておいてくれ、〃不死〃の隊長よ！」

「あいよ」

その言葉に右手を上げて返す。

竜はその翼を羽ばたかせ、空へと浮かぶ。その彼女の背中越しに言葉を掛ける。

なに、少しだけ昔の様にからかつてやろうと思ったただけだ。

「髪、昔みたいに短くなってるじゃねえか。それもそれで似合ってるよ」

「——っ！ 馬鹿！」

髪が短くなったことよって見えるようになった、うなじが少し朱の色を帯びた。この分だと顔も真っ赤だろうな……。

ほんとに締まらない奴だ。

俺がそう笑っていると、

「アナタのその服装は似合ってないわ！」

そう返された。

——ああ、そう言えばTシャツ短パンのままじゃん。

Tシャツ短パンに西洋剣を持つ青年……。締まらないにもほどがある。

どうやら、ジャンヌだけでなく俺も締まらないやつだったみたいだ。

——とりあえず、早めに着替えよう。

先決するべきはまずこれだ。

第四話

「隊長、この村ももうダメです。まだ襲われてそこまでの日は経っていませんが、生存者は見つかりません」

副隊長の報告を聞き、頷く。

竜の魔女となったジャンヌと別れて一週間、俺たちはオルレアン周辺の町や村を回っていた。竜の魔女となった彼女と対峙したからこそ分かる。彼女には勝てない。「負ける」ことはないにしても、攻め手のない俺たちからすれば、絶対に「勝てない」相手だ。

それにあのデオンと呼ばれる騎士も付けば一層勝率は低くなり、それにこの一週間の間で出会ったほかの化け物級の実力を持つ奴ら、ラッサーやら、アサシンやらがいることを考えるとその勝率はゼロを通り越してマイナスになってしまふ。アイツらが一人一人の個々だったからこそ、どうにか退けることが出来たが、あんな化け物級の奴らが二人やら三人がかりで来られたら、それこそ逃げの一手を討つしかない。

だからこそ、俺たちは機が熟すのを待つのと同時に協力者を探すためにこうして、オルレアン周辺の町や村を回っていた。

「分かった。報告有難う。とりあえず、死体は発見次第供養してくれ。ゾンビ化する前に頼むぞ。そして、今日と明日はこの街で拠点を張ろう。焦ってもいい案もいい出会いも廻ってこない」

勿論、未だに生存者がいる街もあったのだが、その数は少ない。この様に破壊された村や、街の方が多く感じた位だ。竜の襲撃も日に日にその数を増しており、このままではフランスという国の滅亡は免れないだろう。

——どうして、こんなことを……？

俺の質問に答える人間はいなかった。

そして次の日。俺は、竜によって滅ぼされた街の中でもまだ原型を留めていた建物にいた。一応形だけの本拠地だ。街の殆どの建物にどこかしら破壊の色が残っていたというのに奇跡的に無傷に近いこの建物は、小さいながらも人の暖かみを感じられた。

小さく一つ息を吐くと、兵士時代からの相棒であった西洋剣を鞘に納めたまま右手に持ち、水平に掲げる。何の特徴も無いただの西洋剣。軍に入った時に支給されたそれは高価でもなく、名匠が打ったわけでもない。これと同じ形の剣なら、フランス軍に所属していた奴らなら殆どが持っているだろう。俺の部下だって同じ形状のものを持っている。

しかし、これだけは違った。不思議と手に馴染むのだ。

まあ、軍に所属してから死ぬまでずっと使い続けていたのだから、手に馴染むのは当たり前と言えそうなのだが、何と言うか違うんだ。

心の底、頭の奥、そんな魂やら本能やら、そんな物が俺に訴えるのだ。

——これが俺の武器だと……。

言っている意味が分からないって？

すまない、俺だってイマイチよく分かっていないんだ。

だから、そう言う他にどうしようもない。

試しに部下が持っていた同じ形状の剣を持ってみたが、どこか違和感を感じた。まるで、魚の骨がのどにつつかえたようなそんな何とも言えないモヤモヤしたものを感じた。勿論その剣でも戦えるのだが、俺の本領は発揮できないとそう感じた。

だからという訳ではないが、俺のその本能やら魂やらの訴えと言うのはあながち間違えではないと思っている。

それと、気になることはもう一つある。

この一週間、色々な町や村を回った。その間に数えきれないほどの戦闘をこなした。その時に感じたのだが、この一週間で俺の力は、誤差の範囲内ではあるが上下しているように感じた。いや、これも上手くは言えない。さっきの剣の下り並み……いやそれ以上に確信の持てない話なのだが、俺自身の力の上限と言うものが日に日に変わって言っているように感じられた。そして、その力の上限はここ一週間……。

——いや、ここまで話しておいて悪いのだが、確証を持てなさすぎ

る話なので、この話はここで止めておこうと思う。

別に、引つ張っている訳ではない。俺自身ですら確証のない話をベラベラと話して、他の人を混乱させたくないからということだ。

ちなみに俺自身もイマイチよく分かっていない為、自分自身の混乱を避けるためでもある。この話は追々、確証が持てるようになってきたら話したいと思う。

まとまらない考えを頭から追い出すように、手にもつ剣を横に一振り。

うん、悪くない。生前はあれほど重さを感じていた剣が今では、羽の様とまではいかなくても、木の棒程度の重さを感じるようになった。

——あれもこれも、あのサーヴァントがどうこうと言うのが関係するのだろうか。

デオンも黒いジャンヌもそして、この間戦った、ランサーと名乗る男性や、アサシンと名乗る女性がまるで口癖のように話していた、サーヴァントと言う言葉。これだけ回数を聞けば、サーヴァントが召使い(サーヴァント)を意味することではないことくらい俺でも分かる。

サーヴァントという言葉を出していた人間は皆、化け物並みの実力者だった。デオンや竜の魔女は言うまでも無く、ランサーやアサシンも間違いなく強敵だった。普通の人間では例え千人いても勝機はないだろう。

と、いう事はそいつらと渡り合える実力を何故か手に入れた俺は……。

それに気になることは他にもある。デオンは黒ジャンヌにセイバーと呼ばれていた。セイバー(剣士)にランサー(槍兵)にアサシン(暗殺者)ね……。これが意味することは一体何なのか。

頭を捻った所で答えが出ることはなかった。

——誰か、俺に説明してくれないかな。

黒いジャンヌは俺に説明するのを拒否したし、その後に出会ったランサーやらアサシンやらは真面に会話が出来るような奴ではなかった。

た。少なくともランサーやアサシンよりも遥かに会話が出来るようなデオンとはあの後から会ってはいない。

そんな俺の思いが天に通じたのか、それとも俺のそのため息にも似た心の声が所謂、フラグと呼ばれるものだったのか、それは分からないが俺のその願いは、すぐに叶うことになる。

コンコンと木製の扉が二回ノックされた。

剣を腰に戻しながら、

「どうぞ、空いてるぞ」

と、声を扉の向こうに投げかける。

「隊長、西の方角からこちらに歩いてくる人影が見えるということですよ。数は六」

入って来たのはスキンヘッドの筋骨隆々の大男。我が隊の副隊長だ。

「歩いてくる？ そうなれば奴らの可能性は低いな、一般人か？」

今までの経験上、黒いジャンヌの手下は竜に乗ってやって来ていた。歩きと言うのは今まで一度もない。その経験則から言えば、彼らは竜の魔女の手下ではないようだ。

「そうとも思ったのですが、はぐれの竜がその人影に襲い掛かったようなのですが、それを一瞬で撃破したそうです。間違いなく、奴らと同等の力をもっています」

「そうか、目標はあとどのくらいでここまで着く？」

「このペースでいけばあと、半刻にはこの街の外壁にはたどり着くかと」

「全隊員に命令だ。その人影が敵か味方か判断する。総員各自、目標の前には姿を見せず待機、味方ならばそれでよし、敵ならば一斉に離脱。俺も、敵ならば撤退に徹する」

俺がここまで言い終えた時だった。

——バタンっ！

そんな豪快な音を立てて扉が開けられた。

「何事か？」

副隊長の言葉に駆けこむように入って来た部下は、直立すると、

「隊長及び副隊長に至急お伝えしなければいけないことがございます。こちらに向かっている人影六に大量の竜が襲い掛かっています。その数五十以上、そして、その竜の内三頭の背には人影がありのとこのとです」

竜の背に乗る人影とはほぼ間違いなく竜の魔女関係のやつらだろう。そんな奴らに襲われているとなると、その人影たちは竜の魔女とは敵対関係にあると見ていい。

敵の敵は味方、などという単純な理論で世界が回っていないことは重々分かつている。

しかし、この機を逃せば味方かも知れない人物を失うことになりかねない。

方針は決まった。

「先ほどの命令を取り消す。全隊員に伝令を回せ！ 総員、その人影の援護に当たれ。各自武器を持ち、竜の撲滅に当たれ、その際必ず一匹の竜に対して複数人で当たる様にしろ！ 誰一人死ぬことは許さん！ 竜の魔女の手下との戦闘は禁ずる！ 俺は先にその人影の救援に向かう。お前らは後から合流し、竜の撲滅に徹せよ」

「Oui, mon sieur (了解しました)！」

寸分の違いもなく二人は声を揃えた後、迅速に部屋から出ていった。

あの日目覚めた時から異常な身体能力を見せているこの体なら、きっと、そいつ等が潰れてしまう前に駆け付けることが出来る筈だ。

竜の間を縫うように足を進める。その先には九人の人影。ドラゴンに囲まれながらどうか猛攻をいなしている六人と、そのドラゴンの猛攻に便乗する形でその六人に攻撃を加えている三人。どちらが優勢か何て言うまでも無く分かるだろう。この六人は圧倒的に不利だった。

四方をドラゴンに囲まれ、そのドラゴンの相手をするのに手いっぱいと言った形なのに、それに加えて、三人の攻撃も加わるのだ。不利って言うレベルではない。それに、攻め手の三人の内二人は俺の知っている奴らときた。その実力は痛いほど知っている。

——ん、あの陣形はどういうことだ。二人ほど非戦闘員か？

加えてその六人のうち二人は戦闘が出来ないのか、他の四人が前後左右に立ちドラゴン倒しつつ、竜の魔女の手下の三人の攻撃を防いでいる状況だった。

——そんなのじゃ、すぐに綻びが出る。

そう思った時だった。その陣形のスキを突き、魔女の手下の一人が中央に突入した。明らかにその二人を守っていますといった陣形がそこを狙わない隙は無い。

「——先輩っ！」

大きな盾を持った少女が、中央に立つ人影を守ろうと動く、しかし、それでは遅い、間に合わない。

「よっと、どうにか間に合ったな！ いきなり乱入して悪いがお前らの敵じゃない！ 助太刀に入った！」

金属と金属がぶつかり合う甲高い音がする。

間一髪でどうにか間に合った俺が、ソイツの剣をいなした音だった。

「貴方は一体？」

背中に声が掛かった。綺麗なソプラノの声だ。どうやら、俺が助けたのは女性のような。

チラリと後に視線をやる。

年のころは若い、まだ少女と言える歳だろう。オレンジのショートヘアに同じくオレンジの瞳。肌の色は白くもなく黒くもなく、俺と同じく黄色人種だった。まさか、東洋人？　もしかすると、日本人か？　有事ではなければゆっくりと語りあいたいのだが、あいにく思いつきり有事だ。

とりあえず、彼女の問いかけには通りすがりの悪魔の軍隊長と名乗っておく。

「——まさか、こんなところでまた会えるなんてね。これも運命つてやつなのかな？」

彼とも彼女とも、美少女にも美男子にもとれるソイツ——シユヴァリエ・デオンはその整った顔に笑みを浮かべた。

「お前のような美人との縁なら喜んで受け入れたいところだな」

まあ、ただしここが戦場ではなかったらという注釈が付くけどな。

俺のそんな軽口にデオンは、

「ボクも君のような素敵な人との運命は心がときめくんだけど、君とマスターとの会話を聞くに、君に手を出すと嫉妬の炎で灰すら残らないまで焼き尽くされそうだ」

と笑いながら返し、大きく後ろにバックステップした。

「アサシン！　キャスター！　撤退だ！　引くよ！」

デオンはそのまま大きな声で、仲間に撤退を指示する。

その間も竜の猛攻は続く。

——つち、後ろの二人を庇いながらとなると、中々攻めに転じるこ
とが出来ない。

「なるほど、彼が来たのね。これは誤算だったわ」

その声にまずは、アサシンが応える。白い髪特徴的な武器をもつ彼女はもうやらデオンの提案に賛成らしく、すぐに打ち合っていた手を止め大きく後退した。

「カーミラあんた逃げる気!?!」

アサシンと打ち合っていた桃色の髪の女性は不満らしく、抗議の声を上げるが、

「貴方の息の根を止めておきたいけど、撤退の命令が出たからには従

うわ。彼が来たとなれば、この人数では生け捕りは厳しそうだしね」
「どうやらアサシンの意思は固いようだ。」

「しかし、セイバー。一人の男が加わったとしても圧倒的に我々が有利！ このまま押し切れば、こいつらを一網打尽に出来るのでは!?! 少なくともジャンヌは！ 聖女は！ それを望んでいた筈です！」

「その一人の男が問題なんだ！ 彼は例の男だ。我々三人だけならまだしも、今の状況だと厳しい。ここは一度引くよ。こういう事になるなら、アーチャーも連れて来ておくべきだったね。そうすれば、彼が来るまでに、そのマスターの首か、竜殺しの首が取れただろうに……。まあ、悔やんでもしょうがない、そういうことだから引くよ、キヤスター」

「……なるほど、彼が例の……。これは実に興味深い！ 彼が聖女ジャンヌを！ 聖女を！ 聖女を！ 許せない！ 許せない！ 許せない！ 許せない！」

「でも、その聖女の命令だ。引くよ」

「聖女の命令であれば、仕方がない、しかし、彼は私が……！」

「いいから、早くするよ！ 君は聖女の命令を聞くことが出来ないのか!?!」

「……くっ！ 分かりました！」

竜のブレスをいなしながら、キヤスターと呼ばれた男の方を見る。キヤスターと呼ばれた男は既に竜に乗っていた。

ソイツは大柄の男だった。黒と言うよりは濁り過ぎた色の髪に、それと同じく飛び出さんばかりに出っ張った濁った黒く大きな瞳。その瞳には狂気の二文字がありありと浮かんでいた。デオンの目にも狂気のそれは見えるが、あくまでもデオンの場合は、後付けされた狂気のように感じた。しかし、コイツの場合は……。もうきつと、ずっと前からコイツはどうしようもないほど狂っている。俺にそう感じさせた。

ソイツの声は何処か呪われた憎悪と狂気に満ちた声だった。しかし、どこかで聞き覚えがあるような声だった。

ソイツは黒く染まったジャンヌよりも更に黒く染まっていた。

しかし、その狂気に染まった身のどこかに何処となく何処かで見た様な面影を感じた。

——まさか……。

「ジル・ド・レエ卿……？」

俺の口から出た声にソイツは竜の背に乗り空に浮かびながら

「ほう、私の真名を知っているのですか……」

否定はせず、ただ肯定した。

「どうして……？」

どうして、あの潔白の騎士が……。

生前にジャンヌの件でお世話になったため彼とは何度か顔を合わせる機会があった。彼はそんな狂気に染まるような人間では……。一体、俺が居ない間に何が……。

「どうして……？」 そんなことは言うまでも無いでしょう！ 聖女が望むからですっ！」

彼はそう声高らかに叫ぶと竜の背に乗り、俺たちからグングンと遠ざかっていった。

「それじゃあ、悪魔の軍の隊長さん、僕たちは今回は撤収させて貰うよ！ きつと悪魔の軍ももうすぐ来るだろうからワイバーン如きじゃ直ぐに全滅させられると思うけど、それでも足止めにはなるだろうしね。とりあえず、また会おう！」

デオンとアサシンもそれに続き空へと消えていく。それを追うことも出来ず、ただ竜の攻撃をいなしていく。

しかし、どれだけ竜が多くても所詮はあの三人には遠く及ばない。幾ら数で囲まれようと攻撃をいなす程度なら訳のない話だ。周りの奴らもそうなのか、徐々に攻撃に転じ、竜の数を減らしている。これなら、もうすぐ到着する副隊長たちが来ればすぐに片が付くな。

そんな時だった。

「もしかして、貴方はサーヴァントですか？」

またもや背中に声が掛けられた。先ほどのオレンジの髪の彼女だろ。

そして、聞き慣れてそれでいて、今一番知りたかった言葉だった。

「悪いが、俺にもよく分からない。それに俺も色々聞きたいことがある」

でも、まずはこの現状の打破だ。全てはその後だ。

その後副隊長達も加わると竜の殲滅はすぐに終わった。

第五話

「――以上が私たちが話せることの全てです」

橙の癖のあるショートヘアをシュッシュで結っている少女、藤丸立香はそう言った。

さきほど、俺が危機一髪割り込んで守った少女はどうやら、あの集団のリーダー的なポジションらしく、色々な事を話してくれた。橙色の髪に、茶色の瞳、髪は短く昔のジャンヌを思い出させる黄色人種の少女は、未来から世界の危機を救うためにこの世界にやって来たのだと語った。

彼女からは色々とは有意義な情報を聞くことが出来た。

聖杯について、サーヴァントについて、マスターについて、魔術について、カルデアについて、人理について、未来の地球が亡びることについて、レイシフトについて、そして、特異点について……。

西暦2016年、人類は突如滅びることになる。その原因となる事柄は特異点と呼ばれ、世界各地、色々な時代に存在すると言う。その特異点を正し、歴史を元の通りに戻すことが彼女たちの使命なんだとか。

そして、この中世フランスに来てからはもう既に結構な日数が経っているらしく、初めは立香とマシユの二人だけだったが、今では仲間も増え、先ほどの四人に加え、さらに数人の協力者を得ることが出来たらしい。

「なるほど、つまり君たちは竜殺しの呪いを解くために聖人を探しており、二手に分かれた。そして、聖人を分かれた仲間が見つけた。その仲間と合流するために、集合場所であるここに向かっている最中にあの竜の軍勢に襲われたと」

「はい、そうなります」

立香の隣に立つ少女が俺の言葉に応える。立香と同じくショートヘアのその少女の名前はマシユ・キリエライト。自分の身の丈ほどある大きな盾が特徴の彼女はサーヴァントと人間が融合したデミ・サーヴァントと呼ばれる存在だそうだ。

「隊長、どう思いますか？ サーヴァントだとか、人理だとか、魔術だとかよく分からんことをのたまっておりますが……とてもじゃないですが、与太話にも程があります」

俺の横に立つ副隊長は怪訝な様子を隠そうともせずと言う。

俺たちが昨日、今日と拠点にしている滅びた街。その中で唯一奇跡的に無傷だった建物の中には俺を含めて四人の人物がいた。

本当ならば、マシユと立香を未来からサポートするモニター役、ロマニ・アーキマン、通称ロマンと呼ばれるスタッフもいるらしいのだが、通信が安定せずに連絡が取れないらしい。未来からの通信やら、レイシフトやら、俺が知らない2016年の地球は科学的にも他の分野的にもとんでもないくらい進歩しているらしい。

その他の人間は先ほどの戦闘の傷を癒したり、竜の肉で料理を作ったりと色々をやっているため、ここにはいない。

この調子でいけば今日も難癖つけて飲み会が始まりそうだった。

「確かにいきなり、魔術やら、人理やら言われれば与太話と切つて捨てるが、現状を見てみる。竜が空を飛び、死者がゾンビとなって人々を襲っているんだ。魔術やら、サーヴァントやら、聖杯の話が本当だと裏付けているようなものだ」

普通の世界でいきなり、魔術やらサーヴァントやら言われれば与太話と切つて捨てるか、そいつの頭の中を本気で心配しただろうが、生憎現状は普通ではない。ドラゴンが空を舞い、死者が生き返り、明らかに人の身以上の力を持つ奴らがうろついているんだ。

彼女達の言葉を信じるよりほかない。

今の俺に出来ることは、あるがままの世界を受け入れることだけ。考えるのも、疑問に思うのも、否定するのも、肯定するのもその後だ。

「まだ、君たちに聞きたいことはあるが、あまりこちらから一方的に聞くのもあれだ。今度は君たちの方からの質問に答えよう。何か聞きたいことはあるか？」

「貴方はサーヴァントなんですか？」

「それについては何も言えない」

立香からの質問にこう返し、さらに付け加える。

「自分でもよく分からないんだ。サーヴァントになれば座から色々バックアップを受けるらしいが、俺にはそのバックアップがない。知識だって生前に持ち合わせたものだけだ。でも、あの時、あの場所で俺が死んだのは間違いない。死んだ人間が甦る道理はない。と、言うことは俺もサーヴァントと言えるのかも知れない。それに、竜の魔女の手下であるサーヴァントとも打ち合える力を何故か持っている。人間でもなく、あのゾンビとも違うのなら、それはサーヴァントと言えるのではないかな」

実際に自分でもよく分かっている。でも、今まで聞いた情報をまとめると、サーヴァントである可能性が高いようだ。

確信の得ない俺の言葉を聞いた後、立香の横に立つマッシュが口を開いた。

「貴方からは、サーヴァントとも人間とも言えない独特の雰囲気があります。どちらでもあり、どちらでもないような……。人間とサーヴァントが融合したデミ・サーヴァントの私以上に不安定です。彼女のように不完全に召喚されたのでしょうか？」

「それにしても、完全にサーヴァント化している彼女と違って彼は不安定すぎる……。こういう時に限ってドクターロマンとは連絡取れないし……」

マッシュの言葉をうけ立香は顎に手を当て、むむむと眉間に皺を寄せ

る。「まあ、俺の事は自分でもよく分からないから置いておこう。俺がサーヴァントであれ、人間であれ、君たちの敵ではないことは間違いない。むしろ、目的も同じだ。他に何か聞きたいことはあるかい？」

俺の言葉に、立香はゆつくりと口を開いた。

「貴方は一体何者なんですか？」

その彼女の質問に答えたのは俺ではなく、横に立つ副隊長だった。

「お前ら、そんなことも分かっていたのか？ 未来からこの時代に来たと言うから、てっきりこの時代の人間については調べて来た

ばかり思っていたんだがな。このフランスで黒目黒髪の軍人と言え
ば、この人しかいないだろう。いいか、よく聞け、この御方こそがあ
の世に一番近い隊の隊長であり、「不死」、「不死不殺」、「悪魔」
の二つ名を冠する人物。そして、かの聖女ジャンヌダルクの師であ
り、一緒に処刑された、俺たち悪魔の軍の隊長様よ！」

情報交換は、訪問者が来るまで続いた。

——コンコン。

木製の扉をノックする乾いた音が部屋に響いた。

情報交換も殆どが終わりかけの時だった。色々と決まったことも
あるので、それについては、後々時間があるときに話したいと思う。

「はいよ、あいてるよー」

意外と話し合いが長引いたため、宴会を待ちきれない部下達が突入
でもして来たか。

そんな事を考えていた俺だったが、

「……えい！」

ドアの向こうからそんな驚いたような声が聞こえてきた。

聞こえてきたのは、「え」という一文字だけ。しかし、それでも俺
には十分だった。

その声を俺が聞き間違える筈はない。

——まさか……。

扉が開かれ、二人の人物が入ってくる。

一人は背の高い男性だった。渋柿色の鎧を身に纏い、その腰には一本の剣。凛々しい顔つきにその目には悪を嫌う正義の二文字が見て取れた。一目見ただけで分かる。彼は聖女と同じく、神の名の下に生きて来た高名な人物だと。俺たちとはまるで正反対。彼はきつと聖人と呼ばれる人物なのであろう。彼が一步部屋に足を踏み入れると長い髪が揺れた。

そして、もう一人。ローブを羽織っていた人物はそのローブを脱ぐ。

その人物は女性であった。純金の様な癖のない黄金の長い髪に、澄み切った青い瞳。碧眼は慈愛や慈悲の文字を宿し、整った顔はまるで女神のようだった。身に纏う衣装は漆黒ではなくあの時と同じく、純白のまま、穢れを知らない聖女のままだった。

全てがあの時、あの場所のままだった。

サーヴァントになれば、同じ場所に同じ人間が召喚されることもあると、先ほど立香から聞いたが、まさか、本当にそのままの人物が二人もいるなんてな……。いや、これはでも……。あの竜の魔女に比べて……。

彼女と目が合う。彼女はよっぱどの驚きを受けたのか口をまるで酸素の足りない金魚のようにパクパクとさせた後、

「——お兄ちゃん!? どうして、ここに……!?!」

——それは俺が聞きたいよ、ジャンヌ。

何の因果か分からないが、こうして俺と聖女ジャンヌダルクはこうしてフランスのある滅びた街で再会するのだった。

「お兄ちゃん……?」

ジャンヌの言葉に首を傾げるマシユと立香の視線に気づいたジャンヌは、顔を真っ赤に染めながら、

「えーっと、これはあれなんです！ 間違いました。お兄ちゃんだなんて言っていないです！ えーっと、彼は、えーっと！」

顔を熟れたトマト以上に赤くさせ、あわあわと手をぶんぶんと振り回すジャンヌ。何とも締まらない奴だ。この辺りは黒い方と変わらないようだ。

思わず笑みが零れた俺に、ジャンヌは、

「な、何を笑っているんですか！ このままじゃ私のイメージが！

聖人としてのイメージが……せつかく真面目に作って来たのに……」

そんなイメージは元よりないと思うのは俺だけだろうか……。

様々な疑問点があるものの、俺たちは手を結び、オルレアンにて竜の魔女を倒すために共闘すると約束した。

物語は大きく動き始める。

第六話

屋上に立ち、街を見渡す。建物自体あまり高くないため、見通しは良くはない。それでも、穏やかな風が吹き抜け、気持ちが良い。街は夕日によって赤く染まっていた。

外壁の向こうに沈む夕日を眺めながら考える。

聖杯について、サーヴァントについて、座について、特異点について……。手に入った多くの情報を整理して、吟味して、組み合わせる。

あの時の竜の魔女との会話と、シュヴァリエ・デオンの反応、その後に出会った竜の魔女の手下達、ランサーやアサシンと名乗ったサーヴァントの反応。そして、先ほどの立香とマシユの反応。

情報と体験を加味して考える。

サーヴァントは英霊であり、その力は知名度や伝承によってもある程度決まる。そして、今の俺の状態は力こそサーヴァントと同等の物があれど、その存在自体はともあやふやだということ。

デミ・サーヴァントであるマシユ曰く、人間とサーヴァントがまるで見えり合っているかのようだ、ということらしい。この言葉を聞けばあの時のデオンの反応にはある程度の納得がいく。

——この身はサーヴァント足るや、それとも……。

分かってる。自分自身のこととは一番自分で分かっている。

俺が感じている力の不安定さ、力の上限が上がったり、下がったりするという感覚、そして、人間のようなサーヴァントのような、不安定な俺の存在。

色々なことを聞いた。色々なことを体験した。

西の空には大きな夕日が沈みかけ、天と地を自分の色へ染め、東の空は既に黒の天幕に覆われていた。夜でもなく、昼でもない。俺は昔から黄昏時が好きだった。

目をゆっくりと閉じ、自らに問いかける。

——俺がこの世界にきた意味はあったのか？

何時もの問いかけを、何時の通りに心の中で唱える。

——意味なんてない。全ては偶然だ。

問いが何時もと同じなら、出る答えも何時もと同じ。

しかし、何時もと同じはずの言葉が何故か今は心の中に重く押し掛かるような気がした。

「お兄ちゃん？」

背中越しに声を掛けられた。聞き慣れた声は、何時もと同じように琳瑯璆鏘となる珠のような音だった。

「なんだ、俺の事は師と呼ぶんじゃないかったのか？」

振り返りざまにそうからかっておく。

あの後、顔を真っ赤にさせあわあわとテンパっていたジャンヌは立香の『師匠じゃなかったの……』という呟きに全力で食いつき、『そうなんです！ 私は今、我が師と言ったんです！何と言っても私の師匠ですから、彼は！ ええ！ だから、お兄ちゃんだなんて言っていないです！ いいですね！』と首を何度も上下させながら言ったのを機に、俺の事を師と呼ぶようにしたようだった。

ちなみにそれで立香やマシユのジャンヌに対するイメージが保たれたのかどうかは、俺が言うまでも無いだろう。

「うう……。今は、いいんです！ 周りに誰もいないし、大丈夫です！」

ジャンヌは真っ白な頬を少しだけ淡い朱に染めると、ゆっくりと歩き、俺の横まで来た。

「綺麗だね」

彼女は俺の方は見ずに真っ直ぐに夕日を見つめる。地に落ちんとする陽に照らされた横顔は何処か神秘的に見えた。

「ああ、綺麗だな」

「お兄ちゃん、座からのバックアップがないって本当？」

「ああ、知識なんて処刑される前のことしか知らないし、サーヴァントがどんなものかなんて立香に聞くまでは分からなかったよ。ジャンヌも不完全な召喚だった？」

「うん、私も聖杯からのバックアップは殆ど受けていない状況だよ。一応完全にサーヴァント化してるし、お兄ちゃんのように全くではないんだけど、ルーラーとして使えない能力も多いし……」

「まあ、お互い似た様な物と言うことか？」

「……うん、そうだね」

「そう言えば、竜殺しの呪いの解呪は終わったのか？」

「うん、呪いの方は無事に解除できたよ。後は傷が癒えるのを待つだけ、後四日もすれば十分治ると思う」

「そっか……」

それから、暫く無言の時間が続いた。先ほどよりも少しだけ冷たくなった風が俺とジャンヌを包んだ。

どれほどの時間が経ったのだろうか？

一分かもしれないし、十分かも知れない。あるいはもっと短いかもしれないし、もっと長いのもかもしれない。

彼女は言葉を探し、俺は彼女の言葉を待つ。

幾何かの時間が流れた後に、彼女はポツリポツリと口を開いた。

「ねえ、お兄ちゃん。黒い私、竜の魔女となった私に会ったんだよね」
色素の抜けた白銀の髪に、憎悪と憤怒を宿した黄金の瞳。憎悪によつて染められた漆黒の衣装を身に纏い、手には竜の紋章が刻まれた旗を持つジャンヌダルク。

このよく分からない世界に訪れたその日に彼女と出会った。

「……ああ」

あの時、彼女と交わした会話。そして、俺を見た時の反応。

全てが物語っていた。彼女がジャンヌダルクだと。

「どう思った？ 竜の魔女と会ってみて」

「――」

俺が言葉を探している間に、ジャンヌはさらに口を開く。

「私はね、あの竜の魔女と会って思ったんだ。――この魔女は私だつて。間違いなく私自身だつて」

ジャンヌはそこまで言う夕日から俺へと目線を移した。穢れを知らない純真無垢な瞳が俺を見る。

「お兄ちゃんも同じことを思ったと思う。そうだよね、お兄ちゃん？」

「――ああ、そうだな。俺もそう思ったよ。竜の魔女は聖女と同じだつて」

これはまごうことなき俺の本心だ。あれは見た目だけが似ている訳ではない。それ以上だ。中身までも同じだ。

俺の横に立つジャンヌダルクと竜の魔女としてフランスを滅ぼそうとするジャンヌダルク。俺にはそのどちらも正しいジャンヌダルクに見えた。そう、言えば何かのボタンの掛け違い、もしくは強い信念があれば、俺の横に立つ聖女ジャンヌダルクも、あのように黒く染まり、竜の魔女になりかねない。

「うん、やっぱり……。マリーは私とあの魔女は違うと言ってたけど、私はそうは思わない。きつと、彼女は私で、私は彼女なんだって、そう思うの。でも、私には彼女がどうして魔女になったのか分からない。私は望んで命を差し出した。お兄ちゃんも自らの意思で、あの終わりを選んだ。その結果がどうであれ、私がフランスを恨んだり、ましてや滅ぼそうだなんて思わない」

ジャンヌダルクと呼ばれる聖女なら、そうだよな。彼女はあの終わりに心の底から満足している。その先に戦乱が再び起こったとしても、彼女の死が無駄死にだったとしても、あの選択をやり直そうなんていうことや、フランスという国を滅ぼそうだなんて考えを持つはずはない。

だから、きつと……。

つまり、これは……。

もつと簡単でもつと単純なことなのだ。

「それに向こうのキャスターはジル・ド・レエだと聞きました。そして、彼が私の様に黒く染まっていることも……。聖杯から知識のバックアップを受けていない私にはその原因が分からない。あの清廉潔白なジル・ド・レエ卿が黒に染まるなんて考えられない。でも、他のサーヴァントの方はジルのあの変容を見てもどこか納得しているようだった。それに、私とお兄ちゃんの関係を知った時のマシユとマスターの反応も……。この世界は何か可笑しい……。」

「——ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんは、世界が可笑しくなった原因が分かる？」

その問いかけに、俺はしばらく悩んだ後に、

「——さあ、俺にはさっぱりだよ」
そう薄く笑うのだった。

「すみません、今戻りました」

青年と別れてからジャンヌは女性陣にあてがわれた建物へと戻った。竜により滅ぼされた街の中でも唯一無傷だった建物。立香達が訪れるまでは悪魔の軍の拠点となっていた建物だが、今では立香を始めとする女性達の宿舎として宛がわれていた。

「おかえりなさい。ジャンヌさん」

外から戻ったジャンヌに声を掛けたのは、デミ・サーヴァントであるマシユだった。

「あれ？・他の皆さんは？」

部屋にはマシユの姿だけしかない。この部屋には、立香、マシユ、ジャンヌ、清姫、エリザベートの五人が寝泊まりするはずなのだが、他の三人の姿が見当たらない。

「清姫さんとエリザベートさんは少し口論になってしまっていて、決着をつけるとか云々で外に出られました。あとマスターはほんの先ほど、用事があると外に……。マスターとは入れ違いになっていましたね」

「そうでしたか」

何やら外壁の外で火の柱が上がったり、鉄と鉄がぶつかり合う音がすると思ったらそういうことだった。あの二人は通信でも仲が悪いと聞かされていたので、そこまでの驚きはない。流石に本気で相手を殺そうだなんて思ってもいないだろうから、少しじゃれ合う程度の物だろう。

「何か用でもありましたか？」

「いえ、ただ気になっただけです」

ジャンヌはそこまで言うと、机の上に無造作に並べてあった紙の束に気が付いた。

「ん？ これは……」

「ああ、これですか？ マスターが書いている特異点やレイシフトについての記録です」

「そうでしたか……」

ジャンヌはそこで、机の一番上に置いてあった紙を見る。明らかにフランス語ではない文字列。彼女からして見れば暗号のような文字列だった。聖杯のバックアップが乏しい彼女では、意味まで理解できない。

——しかし。

「どうかしましたか？」

「この文字は……」

「ああ、それですか。この文字はマスターの国で日常的に使われている文字です。未来の日本という国で使われている日本語と呼ばれる文字らしいです。何でもひらがな、カタカナ、漢字と言った三つの文字があるらしく、完璧に使いこなせるようになるには凄く難易度が高いとドクターも言っていました」

マシユは、私もまだ一部しか読めません、と笑顔になる。

「その日本語がどうかしました？」

「いや、どこかで見えた様なことがあるような気がして……」

彼女の疑問に答える人間はどこにもいなかった。

「――以上が報告になります」

「そう、分かったわ。報告有難う」

オルレアンの本拠地にてセイバーからの報告を受けたジャンヌオ
ルタは、誰にも分らないような小さなため息を一つ漏らした。

報告の内容は、未来から来たマスターとそれに協力するサーヴァン
ト達をあと一步のところまで追い詰めたが、悪魔の軍の介入により失
敗に終わったと言うこと、悪魔の軍と彼女たちが合流し、さらに聖人
を連れた白いジャンヌ達も彼らと合流したと言うことだった。

「ジャンヌ、どうされますか？ 二人の聖人が揃ったとなれば竜殺し
の呪いは解かれたと思っていいでしょ！ 攻めるなら今が好機と
このジル・ド・レエは見ます！ 今こそ、我ら全ての力をもって彼ら
を殲滅すべき時！」

キャスターがそう声を震わせて言う。憎悪と復讐に染まった声が
辺りに響いた。

彼の言うことは間違っていない。敵の戦力がまだ全力を出し切れ
ない内に相手を叩く。敵には手負いの人間がいるのだ、この気を逃せ
ば敵は更に力を付けることになる。誰がどう考えても攻めるのなら
今である。

しかし、

「いえ、攻めはしないわ……」

「何故です！ ジャンヌ！」

「簡単な話よ。竜殺しの傷が癒えたら彼らはどうすると思う？」

「そ、それはオルレアンに攻め込むかと」

「ええ、その通りです。それもフランス全土でちまちまと防衛戦をし
ている旧フランス軍隊も集めてね。最大の戦力でオルレアンに攻め
込むでしょう」

「では、ますます今が好機では！」

「いえ、だからこそ今は待つのです。今攻め込んだところで彼が向こ
うにいるのなら主力の殆どを逃がしてしまうことになるでしょう。」

それではまた、イタチごつこの始まりです。相手の全てをこちらの全てを持って完膚なきまで叩き潰す。これで、この戦は終わりです。後はフランスを燃やし尽くせば終り……簡単な話ではないですか」

ジャンヌオルタは薄く笑うと、

「それとも、ジル・ド・レエ卿は私が負けると思ってた?」

「いえ! 決してこのようなことは思っていない! ジャンヌには勝利以外有り得ない!」

「そう、ならそれでいいでしょう。竜殺しの傷は後四日もすれば治るでしょう。で、あれば彼らが攻めてくるのは、五日後の朝が濃厚ね。それまでに竜を呼べるだけ呼んでおきなさい。勿論、戦力を増長するのも大切だけど、並行してフランスを破壊するのも忘れないようにね」

そんな時だった。報告を終えた後、一言も口を開かなかつたセイバーがその口を開いた。

「マスター。無礼を承知で一つ意見を申したい」

「なにかしら?」

「マスターが何故、フランスを滅ぼそうとしているのか、その本当の理由を話して欲しい」

片膝を着いたまま首を上げずにセイバーは話す。その姿はまるで騎士そのものだった。

「なっ! サーヴァントの癖に生意気な!」

「ちよつと待ちなさい、ジル」

今にも襲い掛かりそうなジル・ド・レエをジャンヌオルタは止めると、再び視線をセイバーに戻した。

「それはどういう意味かしら? 私は前に、私を裏切ったフランスと言う国を許せないと言った筈だけど?」

「それが本心ではない事くらい誰でも分かります。何があつたのですか? ジャンヌダルク程の聖人がそのように黒く染まるのなら、それなりの理由が有る筈です」

「——アナタはそれを聞いてどうするのかしら?」

「納得のいく理由でしたら、〃心の底〃からマスターの剣になることを誓います。私や、アーチャーは狂化が無いほうが自由に立ち回りが出来る分、狂化されるよりよっぽど強いと思います」

セイバーはそこまで言いきると顔を上げる。その目に嘘偽りはなかった。

そして、ジャンヌオルタはしばらく考えた後、

静かに口を開くのだった。

世界の命運を決める戦いまで残り四日。

第七話

それは決戦を明日に控えたある日の夜の事だった。日はもうすっかりと落ち切り、空には満天の星空と上限の月が浮かんでいた。日本にいた時はまず見る事のなかった頭上一杯に広がる星の海。

俺が住んでいた日本では例えば日が落ちたとしてもネオン街の煌びやかな光や、ビル群の発する光で、星の瞬きなんて物はかき消され見ることには叶わない。特に俺が住んでいたのは首都東京ではなかったものの、地方でも大きな都市のひとつだった。そんな地方都市では、星を見る機会なんて限られていた。

月明かりと星明りが辺りを優しく包み照らす中、ぼんやりと空を見ながら考える。

——これまでのこと、そしてこれからのこと。

今まで得た情報とそして体験を加味して考える。

——俺のやるべきことは何か？

竜殺しの傷は既に癒えた。明日には存分に力を発揮できるだろう。そう明日には全てが決まる。

賽は既に投げられた。俺がとるべき行動も、そして、俺がしなければならぬことも分かっている。

世界は間違っている。正しい選択肢なんてないことも多く、時には選択肢がないこともある。そして、多くの選択肢があると思えば、間違え方しか選べないことだって多い。

——しかし、今回ばかりは俺が取れる選択肢の中に正解は存在する。

誰がどう見たって間違いのない、正しい選択肢が存在する。その、選択肢をとることに不満はない。元よりそれ以外の選択肢がないにも等しいのだ。

でも……。

——その正しさと言うのは世界にとっての正しさではないのか……？

何度も心の中で考えた疑問の答えは結局疑問のまま……。それに

答えが出たところで俺が

取れる選択肢は決まっている。

「こんばんは、隣良いですか?」

声が掛けられた。聞き慣れない声に振り向けば、橙の髪に茶色の瞳。月明かりに照らされた肌は白過ぎず、そして黒過ぎず、典型的な黄色人種の色だった。その姿は俺に故郷を思い出させた。

「こんばんは、こんな夜に女性が一人でこんな所に来るなんていけないな」

もしも襲われたらどうするつもりだ? と少女に問いかける。

この滅んだ街に今いるのは、立香やマシユを始めとするカルデアの人間と後は彼女たちの仲間のサーヴァントとそれに俺たちの軍しかない。女性を襲う奴なんて俺の軍にはいないのだが、まだ知り合つて数日の彼女たちにとってはそれを知る術はない。

「大丈夫ですよ。あの人たち、見た目は怖いですが、良い人ばかりでした。とても、信用してます」

彼女はそう言つて笑う。年相応の無邪気な笑顔だった。

「見た目の事を言つてくれるな。元々、お尋ね者やらくでなしの集まりなんだ。そのくせ、精神的に弱いからな。君のような女の子に嫌われたとなれば、ショックで泣きかねん」

そう言つて俺も笑つておく。

「大丈夫ですよ。最初は怖かったですけど、この数日間で彼らが優しい人だと言うことが分かりました。毎日、お祭りのようで楽しかったです」

立香はそう言うと、俺の横に腰を下ろした。俺との距離は1mほど。

「それは良かった。まあ、お祭りと言つてもアイツらが酒を飲みたいだけの口実で宴会を開いていただけの話だけだな」

ここ数日毎日のように宴を開いた。襲つて来る竜の肉を焼き、そして破壊された町の中で無事だった酒瓶を集めての宴会。毎晩毎晩、みんな馬鹿の様に騒いだ。

特に今日は地方に散らばった部下たちがこの街に集結したため、何

時もよりも派手に盛り上がった。まるで、心に刻みつけるように……。そう、誰もが分かっていたんだ。

明日には戦いが始まる。そうやってしまえば、

——もうこのメンバーで集まることは二度とないと。

昔からそうだった。戦いが終わった後に誰も欠けていないなんてことは一度たりともなかった。

特に俺たちの隊は、明日無き隊やら、致死率150パーセントの部隊なんて呼ばれてきた隊だ。一度の戦いで半数以上の人間がいなくなるなんてことが普通だったし、酷い時では四分の三に近い人間が命を落とすこともあった。

俺たちの隣には何時だって死があった。明日は我が身だった。

だからこそ、俺たちは束の間の時間で酒を片手に騒ぐ。大声で歌い、大酒を飲み、大飯を食らう。

まるで——「俺はここにいた」、と誰かの記憶に残すように……。

「隊長さんは、部下の皆さんにとっても慕われているんですね。皆さん口を開くたびに隊長は、隊長は、って言っていましたよ」

「昔はそうでもなかったんだけどな」

「そうなんですか？」

「寧ろ隊長になったばかりの時なんて、酷かったよ。後ろから剣でバツサリいかれたこともあったしね。戦争で死にかけたことは多くあったし、傷も数えきれないほど負ったけど、あの時の傷が一番深くて重傷だったかな」

そう今は昔の話。それでも尚色あせない戦いの中の記憶。

「そんなことがあったんですか」

立香は意外な物を見たかのように目を丸める。

「まあ、昔の話だけどね。見て分かると思うけど俺たちの隊はろくでなしの集まりだからね。基本的に集団で動く様な奴らじゃなかったし」

今でこそまともにはあるが、それでもフランス政府軍とは折り合いが付かないし、俺の命令でもないと共闘なんぞするものか、といった奴も多い。

「それで、君は何をしに来たんだい？　こんな夜に一人でここまで来たんだ。何か俺に話でもあるんだろ？」

このまま雑談をするのも悪くはないが、明日は決戦だ。特に色々なサーヴァントのマスターである立香は早めに休んだ方がいいだろう。俺が一人でいる時を狙って彼女は来た、ならそれなりの話があるのだろう。

「まずは、お礼を……。あの時は本当にありがとうございました。貴方が駆けつけてくれなかったら私は死んでました」

立香はそう言うのと立ち上がり、頭を下げる。

「気にしないでいいよ。お礼なら十分言って貰ったし、それにあれはたまたま俺が間に合っただけに過ぎない。だから気にしないでいいよ。俺はただ当たり前のことを当たり前にしたまでだ」

当たり前のことをしたただけなのだから、そこまでかしこまって礼を言われるとかえってむず痒い。

そう言って笑うと、

「やっぱり、貴方はジャンヌの言った通りの人ですね」

そう言って彼女もつられて笑った。

ジャンヌがなんて言ったのか気になるところだけど、それはひとまず置いておこう。

竹藪を突いて蛇が出るのも嫌だし、何かむず痒くなるようなことを聞かされたら反応に困る。

「それで、君はただ礼を言いに来ただけじゃないだろ？」

「はい、実は貴方に聞きたいことがあつて来ました」

「聞きたいこと？」

「ええ、一目見た時から思っていました。このフランスの地で、明らかに浮いている黒髪黒目にその肌の色。それに、ジャンヌから貴方が彼女に勉学を教えていた時の話も聞きました。今のジャンヌの思想はとも今この時代の物とは思えない。言うなればもつと先、未来の思想に近いものをもっています。そして、貴方の特徴的なその容姿……。実はその容姿には心当たりがあります。つい先日まで貴方のような人が多く住む国に住んでいましたので――」

そこまで言い終えると、立香は大きく息を一つ吸い込んだ。彼女の口から漏れたのは聞き慣れたフランス語ではない。

どこか懐かしく、そして忘れることのできない言葉。俺の根源とも言えるその言語は、

『——貴方はもしかして、未来の日本から来たのではないですか？』

——日本語と呼ばれる言葉だった。

藤丸立香と青年の間でそんな会話があった最中、場所は変わり街の外壁にある見張り台に一人の大男がやってきた。

筋骨隆々の体に、スキンヘッド、そしてその顔には額から鼻の右横を沿うように一本の刀傷の跡があった。どこからどう見ても堅気には見えないその男は見張り番の兵士に声を掛ける。

「おう、ご苦労。異常はないか？」

「副隊長、お疲れ様です！ ええ、大丈夫です。竜の一匹も見当たりません」

見張り番はそう報告する。夜の帳が昇り、辺りは闇に包まれているが、人よりも目がいい彼らにとってしてみれば、何の問題も無い。星の光だけで十分辺りを見通すことが彼らにはできた。

「そうか。それはご苦労。お前も明日は決戦だ。交代がくればしっかりと休むように」

「Oui, mon sieur (了解しました)！」

見張り番の返事を聞き、彼は見張り台を後にする。ここ数日夜に奇襲があることはなかった。在ったとしてもはぐれた竜が二三匹迷い込んだようにやってくるだけ、今日も恐らく何事もないとは思うが、警戒するにこしたことはない。

副隊長は見張り台を後にし、最後にもう一度外壁の周りの見回りをして寝ることにしようと決めた。

そして、その見回りの途中。

——ん？

視界の隅を何かが高速で横切った気がした。

しかしそれは一秒にも満たない刹那のこと、副隊長は頭を捻り気のせいかと足を踏み出そうとした時だった。

『スキンヘッドにその顔の傷、一応問うが、お前が悪魔の軍の副隊長か？』

闇夜に紛れ女性の声が聞こえて来た。聞いたことのない声だ。

——まさか、敵襲か!?

副隊長が緊急事態を知らせようと口を開いた時、

——ヒュン。

そんな風邪きり音を立てて彼の頬の横を何か高速で横切った。

『仲間を呼ぼうとしても無駄だ。お前が言葉を発するより、私の矢がお前の額を貫く方が早い』

辺りは闇に包まれ人影どころか生命がいる気配すらない。しかし、狩人は確実にそこに存在してる。

何処からか聞こえてくる声と、頬を伝う一滴の血がそのことを証明している。

『何、別にお前をここで葬ろうなんて思っていない。そうだったら話しかけるより前にお前の額を打ち抜いている。ただ、悪魔の軍の副隊長に話があるだけだ。もう一度問う、お前が悪魔の軍の副隊長か？』

長居をすると、こちらのサーヴァントに感づかれるからな、三度目はないぞ』

立香と別れてからも暫く俺は星と月を眺めていた。

満天の星空が見えるこの世界では流れ星を探すのにも苦勞しない。こうやって、ぼんやりと眺めていれば嫌と言うほど見つけることが出来る。ほら、さつきもそこに。

小さく一つ息を漏らし、座禪を組む。

そして、腰にぶら下げている剣を鞘ごととり右手に持つ。そして、座ったまま軽く振るう。

ヒュンと風を切る音が辺りに響いた。うん、間違いない。

——俺の力はここ数日で上がっている。

自分自身のことだからこそ分かる。サーヴァントの割合が強くなっているのだ。

——なるほどね、これはそういうことか……。

俺のその眩きは夜風に乗り誰の耳にも入ることはなかった。

「お兄ちゃん、ここにいたんだ？」

「ん？ 今日はやけに客が多いな。どうしたんだ？」

聞き慣れた声は最早顔を見なくても分かる。剣を腰に戻すと体ごと振り向く。

「少し眠れなくて」

穏やかな月明かりを受け、柔らかくほほ笑む彼女がいた。月光に包まれた純金の髪は光の加減によりどこか金にも銀にも見え、その神秘さを増し、星の瞬きにより彼女の全てがより神聖に見えた。

そう、まるで物語に出てくる聖女がそこにいた。

「明日は決戦だ。早く寝ろよ」

「うん、分かっている。少ししたら帰るよ」

「座るか？」

俺の問いかけに彼女は小さく頷くと俺の横に腰を下ろす。

その距離は近い。肩と肩が触れ合う距離だった。

「結局敵襲はなかったね」

「ああ、そうだな。やっぱりなかったな」

俺と彼女の予想通りの結果だった。半ば竜の魔女本人でもある、ジャンヌダルクとジャンヌダルクをよく知る俺の意見は同じで、敵襲はしないと言うものだった。

俺たちの答えは同じ、竜の魔女はオルレアンにて俺たちを待ち構え、そこで全ての決着をつけるつもりだということ。

そして、俺たちの予想通り相手のサーヴァントがここを襲ってくることは今まで無く、小さな竜の群れがたまに襲ってくる程度のものであった。それもきつと、竜の魔女の命令ではないのだと俺は思っている。

「そう言えば聞いたよ、また何処かの村が滅ぼされたんだって?」

「ああ、ここ以外の街や村は毎日のように襲われているらしい。フランスは既に崩壊間近だ」

部下の話によるとここに敵が襲ってこない代わりに別の場所での交戦が激しくなっているとのことだった。俺たちにとっては見れば訳のない竜の相手でも一般人にとっては村や町を滅ぼす脅威になる。特にフランス全土のサーヴァントがここに揃っている今、その被害の進行は速度を速めている。

「でも、それも明日には全てが終わるね」

彼女は言う。その目は空の星を見ていた。

「そうだな」

泣いても笑っても明日でこの世界の運命は決まる。そう、どんなに足掻いても結末を迎えることになる。

「ねえ、お兄ちゃん、一つ聞きたいことがあるんだ」

少しだけ思いつめた様な彼女の声。

「……なんだ?」

「明日には全て終わってしまうから聞くなら今しかかないと思ったんだ。前にも一度聞いたことが在るけど、もう一度聞くね」

そこまで言い終えると、彼女は俺と目を合わせた。穢れを知らない碧眼が俺を射抜く。

「お兄ちゃんが隠している秘密を私に話してほしいんだ——貴方は一体何を私に隠しているの？」

「別にまだ何も言わなくていいよ。だから続けるね。私、見たんだ。マスターの部屋で、マスターが書いた文字を。私には読めない文字だった。マッシュが言うには未来の日本って言う国で使われている文字らしいの。だから、私には読めなくて当然だった。でも、私にはその文字によく似た物を何処かで見た記憶があった」

「遠い遠い昔の記憶。私がまだ戦争にいくもつと前、ドンレミの村でお兄ちゃんにフランス語を教えて貰うよりもつと前、確かにその文字を何処かで見たことがあった」

「思い違い？ 記憶の間違い？ ううん、そんな筈はないよ」
彼女はゆっくりと首を振る。

「だって、それはお兄ちゃんに関することなんだから——大好きだったお兄ちゃんについてのことなら私はどんな昔の事でも思い出せる」
そうこれは今は昔、ドンレミの村での何気のない話。

まだ幼かったジャンヌが俺の部屋に來た時のある日常のページ。

『うんっ。今日お兄ちゃん手伝いないって言ってたから遊びにさそおーと思っ！ お兄ちゃんは何してたの？』

ジャンヌは背伸びをして俺の机を覗き込む。俺が自作で作ったこの不格好な机はジャンヌの身長だと背伸びをすればどうにか机の上が見えるくらいの高さだった。

『うわー、文字がいっぱい……お兄ちゃんが書いたの？』

『ああ』

『凄いね、お兄ちゃん！ もう文字も書けるんだ！ 私なんて最近習

い始めたばかりで……お兄ちゃんの文字なんて書いてあるか読めないよ』

まあ、それはジャンヌだけでなく、この国の殆ど、いや下手をする
と全員が読めない可能性がある。だって、これはフランス語でも英語
でもなく、『日本語』だから、な。

俺の記憶の片隅にも確かにあった古ぼけた物語だった。

そして彼女は口する。全ての始まりであり、全ての終わりであるその
言葉を。

「ねえお兄ちゃん。お兄ちゃんはもしかして——」

「——未来から来たの？」

その問いかけに対する答えを俺は持ち合わせていない。

それぞれの思いが渦巻く中夜は明ける。全てが終わる決戦はもう
すぐそこに……。

第八話

その日は良く晴れた日の事だった。空には水で濡らした画用紙に青い絵の具を思いつきりぶちまけた様な青とも水色とも取れる晴天が広がり、雲の一つも見えなかった。

雲の代わりに見えるのは数えるのも億劫になるほどの竜の群れ。俺たちが今から攻め込まんとするオルレアン空には黒い一つの生き物に見えるような密度で大量の竜が飛んでいた。間違いない、俺とジャンヌの予想通り彼方さんはこの戦いで全てを決めるつもりだろうだ。

晴天を体現したような空はあの時と同じに見えた。

しかし、あの時とは違う。同じオルレアン奪還のための戦いだが、その意味合いが大きく異なる。あの時はイングランドからフランスを取り戻すために、今回は竜の魔女から世界を救うために。

——まさか、再びこの場所での戦いとなるとはな……。

人生塞翁が馬とは言いが、本当に分からないものだ。あの時一緒に戦った少女と同じ場所で今度は敵対する。本当に人生よくできたものだ……。

そう小さく笑みが零れた。

「——っ！——っ!!」

軍服を着た大量の兵士の前に立つのは特徴的な金色の長髪。艶のある金髪を風にたなびかせ、決意の色が籠った碧眼で眼前の兵士を見渡す。手には、純白の旗が風に揺られていた。

フランス全土から最終決戦の為に集められた人数は、あのオルレアン奪還の時よりも同じ程度か、さらに多い。綺麗な列を組み、一心に聖女の言葉を聞くその姿はあの時の焼き直しのようだ。

聖女の前、兵士の一番前立つのは鈍色の甲冑を着こむ戦士、清廉潔白、純白の騎士、その二つ名に相応しい彼の名前はジル・ド・レエ卿。このフランス軍の総大将を務める人物だ。

竜の魔女とジャンヌダルクはとてもよく似ている。当たり前の話だ。竜の魔女は聖女であり、聖女は竜の魔女、その根本は同じジャン

ヌダルクと言う一人の少女なのだから。

だからこそ、彼女をよく知らない人物は聖女を竜の魔女と勘違いしやすい。事実、聖女本人もフランス兵に竜の魔女と間違われ襲われかけたそうさ。

しかし、今はそんなことはない。ジル・ド・レエ卿が「彼女こそが聖女で、竜の魔女は偽物だ。聖女は天の国からこの国を救うために甦ったのだ」と、兵士の前で断言したからだ。勿論、ジル・ド・レエ卿の言葉は適切でない。聖女は竜の魔女で竜の魔女は聖女だ。でも、それを確信しているのはこの場では俺とジャンヌだけだ。ジル・ド・レエ卿が知る筈もなかった。

あの戦いで生き残った兵士であれば、大戦の前に兵士の前に立ち邁進させたジャンヌダルクのことは覚えていようし、白いジャンヌを見てその言葉を信用してくれるという確信はあった。

それでも、混乱はあると思っただが、小さな混乱すらない。ただ、皆黙って聖女の言葉を聞いている。

これもジル・ド・レエ卿の信用と信頼と聖女への信仰が成せることだろう。

『——！！——！！』

聖女の鼓舞に応えるように兵士たちの士気も上がる。もともと自国を守るための戦いで士気も高った兵士たちが救国の聖女を目の前にして更にその士気を上げる。

「隊長」

そんな様子を少し離れた場所から見ていた俺の背中に声がかかる。

「どうした？」

振り向けばよく見慣れた野郎たちの顔。フランス全土で暗躍していた奴らも全てが揃っていた。

最後の最後までフランス政府軍とは折が合わずにあの時と同じように正規軍から少し距離を置いて集まっていた。最後まで我儘と言うか自由な奴らだ。本当にこいつら、らしい。

皆、笑顔だった。思い思いに雑談をしている奴や、得物の最終チェックをしている奴、様々な奴らがいた。しかし、どんな奴も皆、笑

顔だった。今から戦いに行く人間にはまるで見えない。その顔には死に対する恐怖何て微塵も見えない。

「どうしたって、言う必要があります?」

その先頭に立つのは副隊長。その顔に浮かぶのは笑いの色。

彼の問いかけに、俺も笑って首を振る。

「そうだな。それじゃあ」

俺の言葉を受け副隊長が号令を掛ける。

「お前ら! あゝ不死」の隊長のお言葉だ! 聖女の言葉だけでは俺たちは物足りない、なあそうだろ!」

『そうだそうだ!』 『俺たちには聖女じゃなく、隊長の言葉こそが相応しい!』 『隊長! 戦場にて“不死”の二文字を冠する貴方が死ぬはずはないと信じてました!』

「お前ら! 敬聴せよ! 我らが隊長のお言葉だ!」

その声を聞いた部下たちの動きは速かった。笑い声がぴしやりと止まったと思ったら、数秒も立たずに一糸乱れぬ列となり、誰もが背筋を伸ばし、視線を俺へと向けた。その表情は誰しも真剣の二文字を帯びていた。その様子は横に並ぶフランス正規軍と同等かそれ以上の統一感があった。

「まずは、こうして全員が揃ったことを嬉しく思う。お前達、よくぞ竜の群れを乗り越え、誰一人も欠けることなくこの日まで生き残って来た! 流石はあの地獄を生き残った奴らだ! 俺はお前らの事を誇りに思う!」

「そして今日は、あの戦いと同じくフランスの記念すべき日になる!

あの時はイングランドからフランスを取り戻す戦いであり、今回は竜の魔女からフランスを守る戦いだ! 相手は竜を操る竜の魔女、既にその手によって俺たちの愛すべきフランスはその殆どを焦土に姿を変えている! 厳しい戦いになるのは必至だ! ここで、奴を討たなければ、世界が亡びるそうだ! でもな、お前ら! 俺たちには世界を守る戦いなんて柄じゃない、なあそうだろ!」

『その通りです、隊長!』

俺の問いかけに隊員一同が声を揃えて叫ぶ。多数の人数で出され

た声は寸分の狂いも無く同調し、まるで一つの人間が出した声のようだった。

「そうだ！ 仲間からも疎まれ、常に死線に立たされてきた俺たちのようならくでなしには、世界を守るための戦いなんてむず痒くなるだけで、向きはしない！ だからこそ、この度の戦は世界のためではなく、自らの誇りのために戦え！ あの地獄の戦いを乗り越えて守った愛すべきフランスという国のために戦え！ 俺からの命令はただ一つ、己の信念を貫き通せ！」

「この度の戦もあの救国の聖女が付いているんだ、俺たちに負けはない！ そして、この俺も地獄から帰って来た！ 死を乗り越え、三千世界の鴉を殺し、この地に戻って来た！ フランスを守るために、そして、自らの誇りを守るために！ 聖女がいて、そして悪魔である俺もいる……聖女と悪魔の加護を受けた俺たちに最早、敗北の二文字なし！ 相手が神であろうと、魔女であろうと、悪魔であろうと関係ない！ なあ、そうだろう！」

『その通りです、隊長!!』

「なあ、お前ら、空を見て見ろ！ あの時と同じく雲一つない良い天気だ！ 風も穏やかで、気温も過ごしやすい！ なあ、今日は、死ぬには良い日だよな……。だからこそ、お前たちが今日と言う日に死ぬことは許さない！ ろくでなしが死ぬには勿体ないほどの日だ！ さきほど、ジル・ド・レエ卿は、兵士の前に立ち言った！ 『人間であるのなら、その生を捨てろ！ 私たちには聖女がついている』と！ その代わりの言葉として、俺からお前たちに言う！」

「俺たちは人間ではない、悪魔の軍だ！ なら、命を捨てることは許さん！ かの清廉潔白なフランス正規軍と一緒に死んだのでは何かの間違えで天国にも行きかねん！ 前にも言ったように俺は地獄でお前たちと会うことを何よりの楽しみとしている！ だからこそ、死ぬな！ 人間であることが死につながるのであれば、人間を辞めろ！ 俺たちは悪魔の軍だ！ 悪魔であるならば信念を貫き、地獄にその身を落とすまで死ぬことは許さん！」

『『O^うui^解,^まmon^し.^たsieur!!』』

「そして、此度の戦、俺たちの役割は何だ？」

『『『敵陣に誰よりも早く突っ込むことです!!』』』』

「そう、その通りだ！　こんな大一番で奴らフランス正規軍に一番槍の馳走を食わせる訳にはいかん！　一番槍に相応しいのは誰だ！」

『『『それは勿論、俺たち悪魔の軍です!!』』』』

「よくぞ言った！　それでこそ、我が同胞だ！　それでは、お前ら！

武器を掲げろ！　天に向かって叫べ！　勝利はもう既に目の前だ！」

「——Vive La France!　(フランス万歳!)」

今までのので一番の大声を上げ、右手に持つ西洋剣を天へと高く上げる。

『『『Vive La France!!!　(フランス万歳!!!)』』』』

隊の士気が最高潮に達したその時だった。聖女が開戦の合図が告げられる。純白の旗が大きく振られた。

「行くぞ、お前ら！　戦場で最強は竜でもなく、人でもなく悪魔だと言うことを思い知らせてやれ！」

そう全てはあの時と同じだ。ただ、単に敵陣に突っ走る、それだけの話。しかし、それだけの働きが後ろに続く兵士の士気を大きく上げることになる。

「お前たち、フランス軍隊であるのなら、あの悪魔たちに後れを取るな！　聖女が付いている人間の意地を見せてやれ！」

遙か後ろでジル・ド・レエ卿の叫び声が聞こえる。

「『『『うおおおおおおおおおおおおお!!』』』』」

横を向ければ見慣れた面々が己の得物を掲げ、ひたすらに敵陣を目指していた。これほど力強いことはない。

かくしてフランスと、世界を守る戦いはその幕を開けたのだった。

——オルレアン最終決戦開幕。

第九話

竜が飛び交う戦場を駆けるは黒髪の青年を先頭にした悪魔の軍、各自思い思いの得物を片手にある者は矢を放ち、ある者は槍を振り回し、またある者は西洋剣を一閃する。その勢いは落ちることなく、ただ軍団は敵の本拠地オルレアンに向かって足を進める。

しかし、それもやはりオルレアンに近づくとすくなく減り、そのスピードを徐々に落とすことになる。切つても切つても減らない竜にどこからか常に飛んでくるブレスに、急降下からの鋭い爪。そんな猛攻の中では進めるものも進めない。

——つち。

小さな舌打ちが漏れた。初めから分かっていたがここまで竜の数が多いとやっかいだ。先ほどから殴って地に沈める行為を何度繰り返したか分からない。何度も何度も繰り返したのだが、それでも空に浮かぶ数は減ったように見えず、襲って来る火の息や鋭利な爪が減っているようには感じなかった。寧ろ、一步足を進める度にその量は増えているようにも感じられた。

——こういう時はどうするべきか……

戦場は既に乱戦、俺たちの後ろに続くフランス正規軍そして、立香達カルデアのサーヴァント達も竜との戦闘は始まっており、あちこちで戦火が上がっていた。

「隊長！副隊長！」

色々な怒号が飛び交う中、俺と副隊長を呼ぶ声が聞こえた。

「この竜は我々が引き受けます。道を開きますので、隊長たちはオルレアンを、敵の本拠地を目指して下さい！ お前ら、隊長たちの道を開くぞ！ 罅が明かないなら、罅を明けろ！」

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

そして響き渡る叫び声と怒号。

その声を聞きながら俺の横で剣を振るう副隊長と目を合わせる。

そして、どちらともなく同時に小さく頷く。

——信用に値する部下たちが引き受けると言ったんだ。それを疑

う余地はない。

「お前ら、隊長からの命令だ！ 道を開け！ 竜の相手を務めよ！
悪魔の軍の底力見せてやれ！」

俺の叫び声に対して、

『『『O u i , m o n . s i e u r (了解しました)!!!』』』』

統一感のある返事を返した部下たちは得物を持つ手の動きを更に早めた。

——分かっている。ああ、もちろん分かっている。

これだけの数がいる竜の足止めなんて、俺たちの隊の人数ではいくら彼らが強いとはいえ、厳しいことくらい。

でも、彼らは任せてほしいと言った。その言葉がどういう意味を持つのか分かっているはずはない。戦場に誰よりも長くいた彼らなら誰よりもその意味を理解しているはずだ。

その彼らが任せてほしいと言ったのだ。彼らがそう言うのならそう言うことだろう。

「お前ら、戦場で最強は人間でも、竜でもなく、悪魔であることを見せてやれ！」

副隊長の声飛び、竜の包囲網に薄いところが出来た。

「お前ら、命令は忘れるな！」

『『『O u i , m o n . s i e u r (了解しました)!!!』』』』

竜の間を縫うようにして、前に進む。後ろは振り返らない。それが俺に出来るせめてものことだった。

「隊長、副隊長、ご武運を……！」

背中に掛けられた声に応える変わりにその踏み出す足を強めた。

オルレアン最終決戦第一戦 悪魔の軍VSワイバーン 開戦

「これは一体……」

竜の群れを抜けるとその先にはまた別の敵がいた。深紫の体色に何とも言えない化け物の様な体。見たこともないその化け物を形容するならば、ヒトデと蛸を混ぜ合わせたような奇妙な生物が群れを成していた。

「お待ちしておりましたよ。皆さん」

形容しがたい化け物のような生物の前に立つのは数日前に見た顔が一つ。

黒と言うには濁り過ぎた色の髪。そして、飛び出さんばかりに出っ張った瞳は濁った深淵をそのものを現していた。その瞳には狂気の二文字がありありと浮かんでいた。

彼はその手に分厚い本を持っていた。

「お前は……」

「またお会いできましたね。来ると思っていましたよ」

どこかで見た様な面影の残る顔で彼は笑う。それはそうだ。彼は俺たちがよく知る人物の未来の姿。かのオルレアン開放大戦でともに肩を並べ、ジャンヌの処刑騒動で力を貸してくれた大貴族、ジル・ド・レエ卿なのだから。

「しかし、聞いてはいましたが、本当にあの竜の群れをこれだけ早い時間で抜けてくるとは……。貴方の部下たちは、どうやら多少の神秘が宿っているらしい……。いや、貴方をよく見てみると、貴方よりも寧ろ宝具やサーヴァントに近いようですね」

憤怒と嫉妬が混じり合ったような声を出し、彼は笑う。その顔色に清廉潔白、純白の騎士と呼ばれたジル・ド・レエ卿の面影はどこにもなかった。純白の騎士ジル・ド・レエ卿とキャスターと呼ばれたジル・ド・レエ卿は救国の聖女ジャンヌと竜の魔女ジャンヌダルクオルタの関係性と同じだった。

キャスターはジル・ド・レエ卿であると同時にジル・ド・レエ卿で

はない。

「何を言っているんだ……？　頭が狂ってんじやねえか？」

そんなキヤスターに副隊長が言葉を吐き捨てる。

「狂っている……？　何を今さら……！　それに、貴方は分からなくてもその隊長さんは分かかっておられるようですがね！」

そして、また一つキヤスターは高笑いを上げる。

——気に障る笑い方だ。

イラつく気持ちを抑えながら口を開く。

「それで、次はお前が俺たちの相手ということか？」

「ええ、その通りです！　このキヤスター、ジル・ド・レエがお相手いたします！　聖女の前には誰一人として向かわせません！」

キヤスターは狂った笑い声を上げると、

「さあ、お前たち奴らを蹂躪するのだ！」

その叫び声とともにキヤスターの周りにいた化け物がこちらに向かってくる。十中八九そうだとは思っていたが、あの蛸ともヒトデとも言い難い謎の化け物はキヤスターの手下なようだった。

「とりあえず、奴らを抑えるぞ！」

「了解しました！　隊長！」

俺たちの役目は戦場を一番早く駆け抜けることだ。俺と副隊長だけではこの数はどうにもならないかもしれないが、フランス正規軍が来てくれれば、後はその後ろにいる俺たちの切り札、カルデアの立香達が来てくれれば状況はどうにでもなる。

最悪、カルデア組さえ、オルレアンに突入してくれればどうにかなるはずだ。

「全軍、突撃せよ！」

そんな時だった。ふいにそんな声が聞こえて来た。

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

そして、俺たちの後ろから大量の足音と叫び声が聞こえてきたと思ったら、鈍色の鎧に身を包んだ兵士たちが大量の化け物とぶつかり合う。

「君には悪いが、アイツだけは私たちが相手しなければ気が済まない

そいつはワイバーンの群れの奥からやって来た。漆黒の巨体に全てを飲み込む大きな口。絶望を体現したようなその巨体はゆつくりとワイバーンの群れを押しつけ地上に現れる。まるで、フランス軍尾最後尾を行く立香達が現れたことを予測していたかのようなタイミングだった。

その邪悪なる巨竜の名は——ファヴニール。

フランスを破壊する竜の群れの親玉であり、邪悪なる竜だった。

かの巨竜の前に一人の大男が立つ。白銀の長髪を風に靡かせ、右手には剣を持つ。その瞳には正義の二文字が見て取れた。誰がどう見ても彼は騎士だった。

「ここは俺に任せて、先に行ってほしい。ファヴニールの相手は俺にしか出来ないだろう」

後ろに立つ仲間たちに、彼は言う。

この竜を倒すことが自らの役目であり、このフランスに来た意味だと彼は理解していた。

彼の言葉に仲間は何か言いたげな様子だったが、彼の真剣な表情と、周りの大量のワイバーン相手に道を開くための戦闘をしている悪魔の軍を見て何も言えなくなったのか、各自思い思いに彼を励ますと、魔の軍が切り開いた道を走り去った。

——まさか、三度顔を合わせるとは……。

まるで予想もしていなかった展開だった。

「ファヴニール！ 邪悪なる竜よ！ 俺はここに居る！ ジークフリートはここに居るぞ！」

その背中を見送ったあと、彼は——ジークフリートは巨竜に向かって名乗りを上げる。

「再び貴様を黄昏に叩き込む。我が正義、我が信念に誓って——!!」

思えば幾重もの壁を突き破りここまでたどり着いた。そして、こうして三度この邪竜と顔を合わせるようになった。

そして思う。あの時の勝利を思い出して、思う。

——あれは勝利して当然の戦いではなく、幾重の敗北からわずかな勝を拾い上げるような戦いだった。

「勝率は低い……。しかし、負けられないな」

自分を信じてくれた仲間の為にも、そして世界の為にも。

ジークフリートは騎士であるのと同時に正義の味方だった。

「ギャオオオオオオオオオオオオオオ!!」

巨竜は宿敵を見つけると大きな口を開けて、降下してくる。

「慎重に策せ、大胆に動け、広い範囲で物事を見ろ、深く一点に集中しろ。海のように、空のように、光のように、闇のように、矛盾する二つの行動をとれ。さすればあの巨竜の首をとれるだろう」

その呟きは誰に対する言葉だったのか……。

今ここに三度目の決戦が始まる。

オルレアン最終決戦第三戦 ジークフリートVS邪竜ファヴニール 開戦

第十話

部下たちが文字通り身を挺して切り開いた竜の群れの間の道を走り抜け、フランス軍が開拓したタコともヒトデとも取れない化け物の群れの間を開いた道を通り抜けると、竜の魔女が陣取るオルレアンは目の前だった。

はぐれた竜やはぐれた化け物を殴り倒し、体力温存のためにフランス軍の最後尾を走っていた立香達カルデア組と合流する。

どうやら立香達は戦闘も殆どやっていないようで体力は十分なようだった。

——ここまでは予定通り、いや寧ろ予定よりも遙かにいい。

この戦いの命運を握るのは間違いなく立香引きいるカルデア組のサーヴァント達だ。文字通り一騎当千の実力を持つ彼らがこの戦いの全てを決める。これまでの乱戦で彼らの体力を温存できたのは大きい。

——そう、それが例え、どんな犠牲の上であつたとしても。

あの竜の群れに立ち向かった奴らがいた。あの、大量の化け物相手に道を切り開いた奴らがいた。

彼らだつてそれがどういうことを意味するか分かっているはずだ。それでも、彼らは立った。

そう、全ては愛するべきフランスの為に。

その思いを背負い俺たちは足を進める。決して後ろは振り返らない。前だけを見つめ、足を進める。

「ん？ あれは……」

そんな時だった。オルレアンの前に人影が見えた。人数は三人。距離があるため詳細は分からないがここに来て人影と来れば、奴らしかいないはずだ。

「マッシュー！」

少し後ろを走るマッシュに声を掛ける。

「ええー！ 分かっています！ 先輩は守ります！」

どうやら、俺の言いたかったことは分かっているようだった。

そんな時だった。

背中にゾクリと寒気が走った。

忘れる筈もない。この感覚は、殺気であり、死の気配だった。

本能のままその場から飛びのく――

――シユン。

刹那だった。俺の立っていた場所には一本の矢が刺さっていた。

「――ツチ。普通のサーヴァントなら、あの一撃で脱落したと言うのに……聞いてはいたがここまでとはな。これは狙う相手を間違えたか」

舌打ちとともに茂みの中から姿を現したのは翠色の髪と頭に生える獣の耳が特徴的な女性だった。

その手には弓を持っていた。

――危なかった。後、一步踏み出していたら……。

思わず背中を流れる冷や汗に苦笑いもでない。

「目の前にいる敵に集中させておいて、出来た隙について矢による強襲……。本当に狂気化されているの……?」

突然足を止めた俺に追いついたジャンヌは小さくそんな言葉を漏らした。

「狂気化……? 何時の話をしているのだ?」

何が可笑しいのか、弓を持つ狩人は笑う。その目には狂気の色は見えない。

「そんな……狂気化されていない? なら、どうして、竜の魔女なんかに手を……」

「何てことはない。彼女が私のマスターであり、そしてそんな彼女に手を貸そうと思ったからに過ぎない」

立香の問いかけに獣の耳を持つ狩人は応えると、矢を手を持った。どうやら、これ以上無駄な話し合いをするつもりはなさそうだ。

「さて、無駄話をするのは性に合わん。悪いが、そろそろ始めさせてもらう。これでも生前は狩人だったんだ、二三人の心臓は射させてもらうぞ」

その言葉を受け、右手に持つ西洋剣を握る。場が緊迫した空気に包

まれた時だった。

「なるほど、ここでお主が来ると言うことは……。それは即ち、わたくしの出番ということですね」

そんな穏やかな声とともに一人の女性が俺たちの前に立つ。フランスではお目にかかる事のできない着物に身を包み、緑色の特徴的な長髪を風に預けながら彼女は堂々とした足取りで狩人の前に立った。その頭には特徴的な竜の角が生え、そして、その手には赤い扇子が握られていた。

「マスター！ この場は私に任せて先にお進みください」

彼女——清姫は優雅な動きで扇子で口元を隠すともう一つの手でオルレアンを指し示す。

——先に進め。

その背中はその語っていた。その背中を見て立香は小さく無言でうなずいた。それを見て俺はオルレアンへと走り出す。

「清姫、ここは任せました！」

立香もそう清姫に声を掛けるとオルレアンへ足を進める。

「そう簡単にオルレアンに向かわせると思っているのか？」

「あら、それならそう簡単に矢を射させると思ってる？」

清姫はオルレアンに向かっていった仲間の後ろ姿を満足そうに見送ると、狩人と向き合う。

「うふふふふ。愛を知らない可愛そうな貴方にわたくしが愛を教えましょう」

「——狂気に染まったお前が愛を語るとは面白い冗談だな」

オルレアン最終決戦第四戦 清姫VSアーチャー アタランテ

開戦

オルレアンの前には三人のサーヴァントがいた。その内の一人は先ほどの狩人と同じく、その目に狂気の色は見えなかった。

「やはり来たか」

その内の一人、槍を持つ男が俺を見るなりに口を開いた。前に戦闘をしたことのある彼の名はランサー。真名はヴラド三世。ルーミアア王であり吸血鬼ドラキュラのモチーフになった人物だそうだ。ヴラド三世がどんな人物なのか世界史嫌いな俺は知らなかったが、その辺りはマシユと立香に色々教えて貰えたので、多分間違っていない筈だ。

「あのアーチャー、あれだけ仕留めると息を巻いていたと言うのに……誰一人として脱落していないじゃない」

そして、もう一人は白い髪に特徴的な衣装を身に纏う女性。先ほどのランサーと同じく、一度手を合わせたことのある彼女はアサシン。真名をカーミラ。「血に狂った悪女」として、拷問に埋没したハンガリーの伯爵夫人だ。

「フウウウウウウウ……アアアアアアア……アアアアアアア……アアアアアアア……」

そして最後の一人は上の二人とは違い、知らない顔だった。生気の抜けた亡霊の様な顔をした青年だった。黒く染まった青年は言葉にならないうめき声のような声を上げる。

そんな三人の前に、こちら側からも三人の人物が立った。

ヴラド三世の前には渋柿色の鎧を着こんだ聖人が、そして、カーミラの前には桃色の髪をした女性が立つ。

「なるほど、各人が我々は抑えてその間にオルレアンへと突入するか……いい考えだ」

そう笑うヴラド三世に、

「そうね、まあ妥当な作戦じゃない？ どうやら因縁がある相手が多

「いみたいだしね」

意味ありげな視線を目の前の少女に飛ばすカーミラ。二人の瞳からはあの時に感じた狂気の色は見えなくなっていた。

「マスター……ここは私たちに任せて先にお進みください」

「そうね、私はここでアイツを倒さないといけないからここでお別れよ。何心配しないで、アイツを倒したらすぐに応援に向かうから……！」

「うん、僕もあいつには用があるからね、ということでここは僕たちに任せて先に行ってくれ」

三人の言葉を受けた残る俺たち——俺、副隊長、立香、マッシュ、ジャンヌ——五人はオルレアンへと足を踏み入れた。

槍を持つヴラド三世の前には一人の男が立った。

「追わなくていいのですか？」

渋柿色の鎧に身を包んだ聖人の問いかけにヴラド三世は笑いながら応える。

「追ってもいいと言うなら追わせて貰うが……そうはいかないだろう？」

「確かにその通りです。悪いですが、ここで沈んで貰います」

「そうか、我が護国の槍を貫けるか試してみればいい」

そして、聖人とドラキュラが激突する。

オルレアン最終決戦 第五戦 ゲオルギウスVSランサー ヴラド三世 開戦。

カーミラの前に立つのは一人の少女。桃色の髪に

「カーミラ。ここでアンタには死んでもらうわよ！」

「うふふふ、貴方にそんなことが出るかしら？」

「私は認めない。貴方が私だなんて！ どうして貴方がサーヴァント

なんかに！」

そう言つてエリザベートは槍を振るう。そう、全ては目の前の女を倒すために、認められない未来の自分を否定するために！ エリザベートは分かっている。ここでカーミラを倒したとしても、彼女が自らの成長した姿には変わりなく、カーミラとは自分自身の未来の姿であることに変わりはない、と。それでも、彼女はそれでも叫ぶ。

——アンタみたいになりたくない！

「何を言うかと思えば……。私からすれば私が私のままにサーヴァントになることの方が忌々しい！ 私は誰もが恐れ、誰もが敬つた血の侯爵夫人であり、その完成性！ おまえのような未完成品とはわけが違う！」

対するカーミラも迎撃をするその手を緩めることはない。カーミラ自身も自分（エリザベート）を認められないのだ。無知を貪り青春を謳するエリザベートをカーミラは許せない。

だからこれは、未来を許さない少女と、過去を許せない女性との意地の張り合いに過ぎないのだ。

今ここに、過去と未来を否定する女の戦いが幕を開けた。

オルレアン最終決戦第六戦 エリザベートVSアサシン カーミラ 開戦。

狂い黒く染まった青年の前に一人の男が立った。

「なんて腐れ縁だ。適当にやっていたら一番どうでもいいヤツがきてしまった」

彼の名はアマデウス。本名をヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。かの世界的有名な音楽家は何時も通りの優しい笑みを浮かべて因縁の相手の前に立った。

「やあ処刑人。その分だとマリアに絶縁状を叩きつけられたな？」

「アマ……デウス……？ アー……マー……デウスウウウウウウウウ

！」

黒く染まった青年は目の前に立つアマデウスを見ると怒りに満ちた叫び声を上げる。

「むむ。なんだいその盛り上がり様は。もしやマリアのヤツ、最後に余計な言葉も付け足したか？ たとえば、そう——同じ屑でも、僕の方が百倍はマシだ、とか？」

「ハア——ハアア——フザけるな。僕はおまえには負けない！ お前だけには負けてなるものか……！」

きつと、アマデウスが彼の前立ったことが切っ掛けだったのだろう。青年——シャルルⅡアンリ・サンソンは正気を取り戻す。黒く染まった姿から本来の姿を取り戻す。

「うわあ!?! もしかして、今ので正気を取り戻したのか!?! あーもう。一言余計だったのは僕も同じか。けど——これでやりがいが出たよ」
アマデウスは笑う。

その顔はいつも通りの優しい笑みだった。

「さあ、シャルルⅡアンリ・サンソン。僕の八つ当たりを受ける用意はいいかい？ めずらしく元気で仕方がないんだ。なにしろ、ピアノを一曲弾くための体力が余っていてね」

「好きにしろ。その指から切り落とす。そもそも僕はね、アマデウス。ずつと前から、死を音楽などという娯楽に落とす、君の鎮魂歌が嫌いで嫌いで仕方なかった！」

一人の女性をめぐる二人の男の戦いが今、幕を開ける。

オルレアン最終決戦第七戦 アマデウスVS アサシン シャルルⅡアンリ・サンソン 開戦

「やあ、待っていたよ」

竜の魔女がいるオルレアンの城の長い廊下を走り切ると開けたホールのような場所に出た。大きな窓から日光が差しこみまるでスポットライトのように中心部を照らす。

その光の中心に立つのは見慣れた顔。男とも女とも、美青年にも美少女にもとれるその人物はいつも通りの優雅で品のある動きでこちらに顔を向けると、柔らかい笑みを浮かべた。

「ここまで出てこなかったと思ったたらこんな所にいたのか……」

「まあね、本当は先陣を切りたかつたんだけど、それだと邪魔されるかもしれないからね」

ソイツ——シュヴァリエ・デオンは妖艶な湿り気のある笑みを浮かべる。

——なるほど、そういう事か。

「ジャンヌ、立香ここは俺に任せて先に行ってほしい」

そして、副隊長に目で合図をする。

——二人を頼んだ。

「隊長ですが、ここは俺がアイツを……!」

「いや、そうもいかないようだ。奴さんは俺を指名だそうだ。なあ、デオン?」

俺の問いかけにデオンは嬉しそうに頷く。

「ああ、その通りだ。キミだけはこれから先に進ませるわけにはいかない。竜の魔女は誰にも負けないだろうけど、それでもキミだけは向かわせるわけにはいかない。遠くの未来から来たマスター、この先にもうサーヴァントはいない。竜の魔女まで一直線でいけるだろう。行くなら早く行きな! 彼がここに残るなら僕は君たちを見逃そう」

「で、でもお兄ちゃん……」

心配そうな声を出すジャンヌ。その瞳は揺らいでいた。

「ここは俺が引き受ける。なに、心配しなくてもすぐに終わらせて、応

援に向かうから大丈夫だよ」

そうなるべく優しい声で語り掛ける。

こんな所で倒れる訳にはいかない。

「それに、竜の魔女を止めるのは聖女の役目だ。お前はイングラントからフランスを取り戻した救国の聖女だろ？　なら、もう一度、今度は竜の魔女からフランスを取り戻すことも出来る筈だ」

——それに竜の魔女は全てを知っている。

彼女の行為がどのような影響を及ぼすのかも、そして何故聖女ジャンヌがフランスの地に召喚されたのかも……。

「……うん、分かった！　任せてお兄ちゃん！　必ず竜の魔女を止めてみせるから！」

その顔には決意の色が浮かんでいた。そして瞳に揺らぎは——。

「さあ、早く行くんだ！」

その背中を軽く押してやる。

「行きましょう！　マスター！　竜の魔女を止めるために！」

ジャンヌは駆けだす。その手にもつ純白の旗がたなびいた。

「必ず応援に来てくださいいね、行くわよマシユ！」

「ええ、先輩！　隊長さんも頑張ってくださいい！」

「隊長ご武運を！」

そんなジャンヌを追うように立香とマシユそして副隊長が駆けだす。

——ああこれでいい。きつと、これでいい。

竜の大群は部下たちが引き受けた。

化け物とキャスターは、フランス正規軍と純白の騎士ジル・ド・レエ

卿が引き上げた。

巨竜ファヴニールはジークフリートが引き受けた。

狩人は清姫が引き受けた。

ランサーヴラド三世は聖人ゲオルギウスが引き受けた。

カーミラはエリザベートが引き受けた。

真つ黒なサーヴァントはアマデウスが引き受けた。

そして、シユヴァリエ・デオンは俺が引き受ける。

ただそれだけの話だ。

「待たせてすまないな」

最後尾を走る副隊長がホールを出たのを見送って、デオンに声を掛ける。

「いや、気にしないでくれ。待つのは嫌いじゃないんだ……いい女だろ、ボクは？」

「ああ、そうだな。とても魅力的な女性だと思うよ」

「キミにそう言っただけで貫えろとまだまだボクも捨てたもんじゃないって思えるよ」

デオンは微笑みながら腰に下げたレイピアを引き抜く。白銀の刀身が差し込む日光に反射してキラリと光る。

その動きを受け、西洋剣を握る右手に力を込める。

「それじゃ始めようか——今回は初めから全力でいくよ」

「それは怖い。ぜひ、お手柔らかに頼むよ」

「キミとなら楽しいダンスが踊れそうだ！」

デオンは右足で地面を蹴る。そしてまるで弾丸のようなスピードでこちらへと突っ込んできた。

オルレアン最終決戦第八戦 悪魔の軍 隊長VSセイバー シュ
ヴァリエ・デオン 開戦

そして、その開戦からしばらくして——

「やはりアナタは私の前に立つのね。無垢な聖女様は、何も知らないまま……。ああ、やっぱり自分の事とは言え虫唾が走るわ！」

「貴方が何を知っているのか私は知りませんが、貴方は間違えている！　ここで貴方を止めさせて貰います！　行きましょう、マスター！」

マシユ！」

オルレアン最終決戦第九戦 未来から来た人類最後のマスター藤丸立香&デミ。サーヴァント マシユ・キリエライト&救国の聖女
ジャンヌ・ダルクVS竜の魔女 ジャンヌ・ダルクオルタ 開戦

第十一話

その剣技は一片の優雅さも華麗さも無い無骨な剣技だった。ただ一つの目的だけを追求した剣は、それ以外の全てを投げ捨ててただその為だけに存在した。

——見事だ。

シュヴァリエ・デオンは幾度となく繰り返される打ち合いの中で何度もその言葉を心の中で吐露した。

——これだけ打ち合っていると言うのに未だに傷一つつけることが出来ないなんて……。

シュヴァリエ・デオンはセイバーで召喚されたサーヴァントだ。勿論その剣技は並みの者では破ることが出来ない達人の域に達している。アーサー王のように聖剣を持っていないデオンはその剣技だけでセイバーというクラスを与えられるほどの腕前を持っていた。

しかし、そのシュヴァリエ・デオンをもってしても彼の剣技を打ち破ることは出来ていなかった。どれだけ激しく攻めても全て受け流される。まるで、水や空気を切っているかのように手ごたえがなかった。

剣技に精通しているシュヴァリエ・デオンですら彼の剣技は見たこともなかった。それはそうであろう。彼の剣技に名前なんて物はない、流派もない。長い時間戦争に身を置いた彼が自然と身に着けたその剣は才能に頼ることをせず、ただ血を吐く様な努力と何度も死の淵に立つことで完成した戦場によって叩き上げられた他の誰もが真似を出来ない彼だけの剣技なのだから。

飾りつけなどどこにもなく、華美や雅さをなくしたその剣は故に強力であり無比だった。

——誰かを殺すための攻める剣でもなく、誰かを守るための守る剣でもない。

彼の剣技はそう——。

——ただ自分が死なないことだけを追求した剣技。

才能でもなく努力と計算によって培われ、完成された剣技を崩すの

は厳しい。

——でも、残念だ。キミには時間と言うものが足りない。

この部屋を通し先へと進ませた人類最後のマスターはとつくの昔に竜の魔女との戦闘を開始しているだろう。先に進んだのは四人。そのうちサーヴァントが二人。人数的にはカルデア組の方に利がある。

しかし、相手が悪かった。竜の魔女は強力無比だ。憎悪によって染められ、復讐と滅びの化身となった彼女を相手するには数が足りない。

そして、そのことに一番気付いているのは打ち合っている彼だろう。現に時間が経つにつれてその顔に些細な変化だが少し余裕がなくなっているのがデオンには分かった。

——確かにキミの剣は見事であり、強力だ。自らが傷を負わないということだけに閉じていうのならキミ以上の剣技を持つ奴はサーヴァントですらないだろう。でも、それだけじゃあボクには勝てないよ。

デオンは激しく打ち合っていた手を一度止めると、大きくバックステップをして彼との距離をとる。

——本当は何時までキミと打ち合っていたいけど、キミには本格的に時間はなさそうだ。

デオンは剣を構えながら彼の様子を確認する。よく観察しなければ分からないが彼の息は少しだけ荒かった。これまで、幾度なく打ち合いそして息切れの一つもしなかった彼が、だ。

「いつまでそんなことをしているんだい？ 守っているだけじゃボクは倒せないよ」

「そういうお前の方こそ、攻めている割には俺に傷一つ付けること出来ないじゃないか」

デオンの軽口に対して青年も笑って皮肉を返す。

「まあ、キミの守りを突破出来ないのは騎士として非常に悔しくはあるけど、そこはキミの守りの方が一歩上を行っていたと割り切るさ……それに、だ。キミの方もボクに傷一つつけることが出来ていない

じゃないか。それでいいのかい？ 竜の魔女の実力はキミも知っているだろう？ 彼女達じゃ逆立ちしたって竜の魔女には勝てはしないよ。まあ、それはキミが行ったところで同じだろうけど……」

「……大丈夫さ。彼女達なら持ちこたえてくれるさ」

「よっぽど彼女達の事を信用しているんだね。キミに信用されるなんて少しばかり彼女たちに嫉妬しちゃうな——まあ、無駄話はこのままで置いて置こうか。ボクにとっては良いことか悪いことか分からないけど、キミの仲間がどうやら頑張っているみたいだしね。何人かは既に座に帰ったみたいだね……」

そう言つてデオンは青年の様子を観察するように見る。

「——うん、こちらは三人は座に帰ったようだね」

「何の話をしているんだ？」

「ああ、こちら側の陣営のサーヴァントが何人倒されたのかつて話だよ。ボクは忠告しているんだよ。」

キミには時間がないだろう？」

「……」

「このままズルズルと打ち合っているだけじゃキミに勝利はないよ。キミは先へと進まないといけない。そして、そのためにはボクを倒さないといけない。自分の事はキミが一番よく分かっていると思うけど、キミには時間がないよ。このままこの戦闘が長引けば長引くほどキミの勝利は遠くなる」

「薄々は分かってはいたが、お前は全てを知っているのか」

「ああ、竜の魔女本人の口から色々と聞かせて貰ったよ」

「そつか——なら、もう言葉は要らないな。お前の言う通り俺には時間がない。だから、俺も全力で攻めさせて貰う」

「ああ、望むところだ。こちらも全力をもってキミの剣技に応えよう！」

戦闘が始まってこれまで続いていた拮抗状態は彼が攻め手に転じることにより崩れることになる。勢いよく地面を蹴り、初めて右手に持つ西洋剣を自らに振りかざすその姿を見て、シュヴァリエ・デオンは嬉しそうに笑うのだった。

「はあはあはあ……」

荒い息をしながら、後ろに一つ大きくステップをしてデオンと距離をとる。

「どうしたんだい？ 先ほどと違い随分余裕が無いようだけど、お疲れかい？」

そんな俺の様子を見てデオンは涼し気に笑う。その体には傷一つなく、息切れの一つもしていなかった。

そんなデオンに対し俺はと言うと、致命傷こそ受けていないものの、体のあちらこちらから赤い鮮血を流し、息は絶え絶え。せつかく用意した新品の衣装は自らの血を吸い込み赤く染まっていた。

——やはり俺の剣ではシュヴァリエ・デオンに傷一つ負わせることは出来ないか。

攻めに転じてからというものの幾度なくその剣を振るってみたがデオンの身に届くことはなく、それどころか隙を見て反撃され体中に切り傷を負う始末だった。

——そりゃそうか、俺の剣は受け身の剣。自ら攻めることなんてしたくないもんな。

そんな俺の剣なんてデオンにとっては赤子同然だろう。寧ろ逆に

防御が落ちて攻めやすくなったに違いない。今までと違うことをするとどうしても隙が出来てしまう。デオンはそんな隙を逃すような剣士ではなかった。

——こりや本格的に時間がないな。

息が切れる感覚も早くなってきた。右腕に入る力も徐々に減って来た。デオンの言う通り表の奴らが頑張っているのだろう。仲間の活躍は嬉しいが、こうまで状況が悪くなるとは思わなかった。

時間が過ぎれば過ぎるほど勝率は低くなる。そして、これ以上の時間はかけられない。竜の魔女の力を考えればいつ立香達がやられてもおかしくないのだ。そして、立香がやられれば人類はそのまま終焉を迎える。

——これ以上時間はかけられない。しかし、普通に攻めたところで攻めきれない。

では、どうするか……。

簡単な話だ。罅が明かないなら罅を明けるまでだ。

額から流れる血を袖で拭うと、デオンを見る。

「どうしたんだい？ 攻めないのかい？」

その顔にはまだ余裕の二文字が見て取れた。

それとも諦めたのかい？ そう笑うデオンに、

「馬鹿言え、少しばかり休憩をしていただけだ」

そう軽口を叩き、西洋剣を構え直す。

——次の攻防だ。その攻防で全てを終わらせる。

「——いくぞシュヴァリエ・デオン！」

「さあ来な！ 悪魔の隊、隊長！」

思いつきり地面を蹴りデオンへと走り出す。最初のころよりも自分そのスピードは落ちたがそれでも生身の人間よりは遥かに早い。お互いの剣の間合いに入るには時間は殆ど要らなかった。

——まずは右からっ！

西洋剣を右から薙ぎ払うように切り掛かる。

「甘いッ！」

しかし、それは簡単に防がれてしまう。

——ああ、分かつてる。

「じゃあ次は左だ」

弾かれた勢いをそのままに空中で回転すると今度は勢いに身を任せ左から切り掛かる。

「それも予想済みだよッ！」

——カン。

そんな甲高い金属音を立ててまたもやデオンの剣に阻まれる。華奢な見た目と違い力強いデオンの剣に押され俺は一瞬体勢を崩した。

——ああ、これも予想通り。

これまで幾度なく打ち合った結果デオンの攻撃のリズムが分かる様になって来た。ここまでは予定通りだ。

そして、体勢を崩した俺に対し、デオンが次にとる行動は——

——鋭い突きッ！

「はあああああああー！」

そんな叫び声とともに放たれた突き。

その目標は俺の左胸——心臓ッ！

——来た。この時を待っていた。

予想通りの展開に思わず口端が上がるのを止められない。

この鋭い突きに対して普段なら右手に持つ西洋剣で防ぐと言う選択肢をとるのだが、今回は違う。

体を半身にして急所を避ける。そして後退するのではなく、一歩足を前に進める。

「——なっ！」

予想外の動きにデオンの顔が驚愕に染まった。

——心臓はやれないが、俺の左腕貫つていけ。

デオンの細い刀が左の二の腕を貫通する。よほど鋭い切れ味なのか骨をも貫通しているようだった。

デオンの右手をそのまま左手で掴む。デオンの腕力を持ってすれぱすぐに弾かれるだろうが、弾かれるまでの刹那の間でも持てばいい。

「——しまったっ！」

デオンが失態に気づき、俺の腕を振り払いレイピアを抜こうとするが既にもう既に遅い。俺の右腕は既に天高く振り上げられている。後はこの腕を振り下ろすだけだ。それでチェックだ。

——これで終わりだ。

力いっぱい右腕を振り下ろす。長かった戦闘が終わった。

「どうやら、ボクの負けのようだね」

美少女とも美青年ともとれる中性的な魅力のある顔をしたデオンは、納得したようであり、どこか達観したような笑みを浮かべるとその右手に持つ得物を床へと投げ出した。

甲高い音を立てて二三度バウンドしたそのレイピアは刀身が半分ほどなかった。

「随分と潔がいいな——いつつつつ……」

レイピアの片割れ、その刀身の半分を左腕から抜きながら言う。抜いた瞬間に血が滝のように出た。

「いくらボクでも剣を折られたら降参するしかないよ。それにあそこでキミが剣を狙わずにボクを狙っていたらそれで勝負は終わっていた。どちらにしてもボクの負けだ」

「そうか、お前が物分かりがいい奴で助かったよ」

左袖を千切り、その布で傷口をきつく縛る。数時間前ならこんな傷でもすぐに治ったのだろうが、今では時間がかかりそうだ。どうやら、今日は左手を使うことは諦めた方がいいみたいだ。

「それにしても、いいのかい？ 止めは刺さなくて……。いや、そう

か、キミの二つ名は……」

デオンは何かに気付いたのか納得の表情を浮かべると、
「本当はキミとまだまだ色々話をしたかったんだけど、生憎キミとボクは今回は敵同士。そして、ボクは敗者でキミは勝者。それにキミには時間がない。と、くればボクが取れる方法はこれだね」

デオンはそう言うのとホールの奥に続く通路に視線を向けた。そこには闇が広がるばかりで何も見えなかった。

「戦闘が終わったら敗者はすぐに消えるべきだ。敗者には敗者の矜持がある。キミの逸話は知っている。だから、キミに介錯を頼むつもりはない。ボクは負けた。座に帰るくらいのは自分でするさ」

——まあでも、この折れた剣じゃ綺麗には行けそうにもないな。

デオンはそう言うのと、

「だから、剣を借りてもいいかな。直ぐに返すから」

そう暗闇に向かって声を掛ける。

そして、その刹那——シユンという風切り音を立てながら一本の剣が暗闇から飛んできた。

その剣は狙ったようにデオンの足元に刺さる。

——その剣は……。

見慣れた剣だった。自分自身の剣を除くと恐らく最も見慣れている剣だった。生前から今ままで数多くの戦場で、戦いで見た剣だった。よく見慣れた双剣の片割れを俺が見間違える筈はなかった。

「ありがとう、助かったよ」

デオンは暗闇に礼を言うと、俺の方を向き直る。

「さて、敗者であるボクは座に帰るとするよ。何となく、キミとはまた会える気がする。また、会えたのなら今度は……今度は一緒にのんびりと過ごしてみたいな——それじゃあ、またね」

そう言ってデオンは笑った。その笑みは今まで見たどんな笑顔よりも魅力的な笑みだった。

オルレアン最終決戦第八戦 悪魔の軍 隊長VSセイバー シユヴァリエ・デオン。

——勝者 悪魔の軍 隊長。

「それで、これはどういうことなんだ？」

光の粒となって消えていったデオンを見送った後、剣が飛んできた闇に向かって声を投げる。

「隊長、先ほどの戦いお見事でした」

闇からできたのは見慣れた顔。いかついスキンヘッドに、まるで睨み付けるような目つき。そして額からは一本の切り傷が鼻の横を通り頬まで伸びていた。

先ほど立香達と一緒に竜の魔女の下に向かった副隊長が何故かいた。

「何だ見ていたのか？」

「はい」

そして彼の手には投げられた双剣の片割れが握られていた。

「お前には立香達の護衛を頼んだはずなんだが、それはどうした？」

「どうしても確かめたいことがあったので、竜の魔女に続く扉の前で別れてきました」

「確かめたいこと……？」

「ええ……もちろん、命令違反だということは承知しています。でも、俺にはどうしても確かめたいことが在ったんです。隊長はいつもおっしゃっていました。自らの信念を貫き通せ、と。俺は自分の信念でここにいます」

副隊長は真っ直ぐに俺の瞳を見返す。その目には動揺も無ければ、後ろめたさも浮かんでいない。

「そうか、お前が何を確かめたかったのかは知らんが、目標は達成できたか？」

「ええ、出来ました」

副隊長はそう言うのとデオンがいた場所に落ちていた剣を拾い上げる。

「——それなら、先に」

進むぞ、と言おうとした口が止まった。

「何のつもりだ？」

目の前には双剣を構える副隊長の姿。その剣先にいるのは俺。

「実は、昨日の夜、街の見回りの最中に竜の魔女の手下と会いまして……。そこで隊長の話を聞かされました。初めは与太話と思い切り捨てようと思いましたが、先ほどの隊長の戦闘を見て確信しました。あの情報は真だったと。ならば、俺は隊長をこれから先へと進ませるわけにはいけません」

副隊長は剣を持つ両手の力を強める。その瞳には決意の色が見えた。

「正気か？」

「ええ、正気です。ここを通りたければ俺を倒してからにしてもらいます」

「最近の俺の力を知っているだろう。あのサーヴァントともやりあえるだけの力があるんだぞ。いくら手負いでもお前に足止めが出来るわけが——」

「——いいえ、それは違います。ほんの数十分前なら兎も角今の貴方にはそんな力はない。寧ろ安定している俺の方が強いかもしれない」
「……………」

「隊長には時間がないようなので一撃で決めましょう。俺が勝ったのなら隊長にはここで、大人しくしてもらいます。——なに、あの時と違って今度は背中から切り掛かるような真似はしません。正面から真っ直ぐ行かせてもらいます」

そう言う副隊長は双剣を構えるのだった。

オルレアン最終決戦特別決戦 悪魔の軍 隊長VS悪魔の軍 副

隊長 開戦。

戦いは一太刀で終わった。

第十二話

戦いは一瞬で終わった。特に特筆するべき点もなく、淡々と流れるようにあっけなく終わった。

「副隊長、剣の腹では人は斬れんぞ」

運命の一太刀が終わった後、俺はそう笑いかける。

「隊長こそ、鞘に入ったままでは剣は人は斬れませんよ」

俺の笑みをうけ、副隊長も爽快な笑みを見せる。副隊長は笑っていた。でも、その笑顔の奥には抑えきれない熱い感情があることがありありと見て取れる。

「まあ、腹だろうと鞘に入っていようとお互い寸止めするのならどのみち斬れてないな」

「その通りですね」

そう言ってお互いに顔を見合わせてまた笑う。お互いの首元にはお互いの剣がある。あと、数センチも近づければ肌に触れるだろう。しかし、お互いにその数センチを縮めることはしない。

どちらともなく剣を収める。そして、俺は何も言わずに副隊長の横を通り抜け、先へと足を進める。

「隊長」

そんな俺の背中に掛けられる声。

「どうした?」

「た、隊長はそれでよろしいんですか?」

その声は少しだけ震えていた。

「……ああ」

その問いかけに小さく肯定する。

「どうして……どうして、貴方はそんなに簡単に……こんな決断を出るんですか!?!」

「……………」

「俺には分かりません! 今の隊長のお気持ち! 俺にはまだあの竜の魔女の考えの方が納得できます! でも、でも、隊長の決意を見させていただきました。ならば俺には何も言うことはありません。」

この先にいる竜の魔女との戦いで全てを決めてください。俺は世界が滅びようとも、そのまま存続しようとも、そのどちらでも運命として受け入れます」

「一度剣を隊長に向けてしまったけじめとして俺はこの戦いで隊長と肩を並べて戦うことは出来ません。ですので、俺は表で竜の相手をしている部下たちの応援に向かいます」

「そうか、あいつらをよろしく頼む」

「ええ、任せて下さい。隊長の御命令、命に賭けても遂行してみせましょう」

お互いに振り向かない。俺はその声を背中で受け、一つ頷くと更に足を進める。

「隊長！ 最後の一つだけ——」

ホール一杯に聞こえるような大きく力強い声を副隊長が張り上げた。

「隊長！ 我々は隊長と生前交わした約束を決して、決して忘れることとはしません！ 我々は“お先”に地獄に行き、そこで隊長を待つております！ ですので、隊長！ 地獄でまた飲みましょう！」

「ああ、すまん。少しばかり待たせてしまう」

「気にしないでください。では、隊長ご武運を……」

それが副隊長と交わした最後の言葉になった。

そして、お互いに走りだす。俺は竜の魔女の下に。副隊長は部下の下に。それぞれの最期の戦いが始まる。

広間を抜けると長い廊下があり、その終わりには荘厳な扉が一つあった。熱すぎて触れれば火傷をしそうな扉を蹴破るようには開けると、そこは炎の海だった。

炎と黒い煙に包まれたその中心に二人の人影が見えた。

——間に合った！

その二人の間に走り込む形で割り込む。火の海の中を走ったため火傷は避けられないが、燃やされるのは前世から慣れたものだ。それに、もう体中ボロボロになっている。もうこうなってしまうえば足の火傷くらいどうってこともない。

「あら、間に合ったの？」

「ああ、どうにかね」

目の前には漆黒の衣装に身を包んだ竜の魔女。あの時と同じく憎悪の見える金色の瞳が俺を見抜く。その体には傷らしきものはどこにも見えず、息も切らしていない。

「……お兄ちゃん」

そして、俺の後ろには白い衣装をとどこどこを焦がし、顔も煤で黒く染まっている聖女がいた。こちらは竜の魔女と違い損傷が激しいらしく息も絶え絶えであり、体中に火傷の跡が見える。きつと、今立っているのも気力によるものだろう。

「すまん、遅れた。マシユと立香は無事か？」

「あの……二人……なら向こうの……柱に……寄りかかる様に……気絶して、いるよ」

ジャンヌが言った方向に目線だけやれば炎の海の向こう、まだ火の手に包まれていない柱に寄りかかる様に座っている二人の姿が見えた。

ここからでは二人の詳しい様子は分からないが、ジャンヌが気絶と
言うからにはまだ息はあるのだろう。

「……ジャンヌ」

「ど……うした……の？」

言葉を出すのも辛いのかジャンヌの声はかろうじて聞こえるくらいのものであった。

「立香とマシユを連れて安全な所に避難している。竜の魔女は俺が引き受ける」

「そん……な！無理だよ！」

「大丈夫だよ、心配するな」

今にも俺に飛びかかって来そうなジャンヌに優しく声を掛ける。

「だから、ジャンヌはマシユと立香を守ってくれ。あの二人が死んだら世界は終わる。それにお前ならその旗で彼女たちを守れるだろう？」

ジャンヌの宝具については既に知っている。彼女の宝具ならこの炎の海の中でも人類最後の希望であるカルデアのマスターを守れるだろう。

「で……でも、それじゃあ……お兄ちゃんが……。それに、お兄ちゃんも傷が……」

「だから、大丈夫だって言っているだろ」

体中が切り傷塗れで血まみれの俺が強がったところで信用して貰えるかどうかは分からないが、それでもこう言う他に言葉はない。

「……………」

そんな俺とジャンヌの会話を聞きながらも竜の魔女は動く気配がない。どうやら彼女も俺と同じ気持ちなようだ。

——最後は二人きりで決着をつける。

それがどう転ぼうと、俺たちの最期はやはりこうでないといけない。

「そもそもお前は戦うのに向いていないだろ？ 戦うのは俺たち兵士に任せてお前は守りを頼む」

「……じゃあ……お兄ちゃん……一つだけ、約束を……して」

荒い息を吐きながら手にもつ純白の旗に体重を預けながらジャンヌは言う。

「……お兄ちゃん……必ず、また会おうね」

——ああ、なるほど、お前も分かっていたんだな、ジャンヌ。
普段なら俺は言葉を濁しただろう。

「ああ約束するよ」

でも、俺はこの時ばかりはすんなりと言葉を出すことが出来た。

——嘘をつくのは得意なんだ。

「大丈夫だよ……私ずっと……祈っているから……」

俺の不安を見透かすように、彼女は優しく凜とした声で語り掛ける。

「ジャンヌにそう言われると大丈夫なような気がするよ」

「うん——」

——またね。

——ああ、またな。

それが彼女と交わした最後の言葉になった。

炎の海に道が出来た。柱に寄りかかる立香とマシユまで続く道が。

「……………」

竜の魔女は何も言わず、ただ黄金の瞳でこちらを見るだけだった。

——行くなら、さっさといきなさい。

彼女の瞳はそう物語っていた。

「待たせて悪かったな」

ジャンヌが二人の下に辿り着くと同時に炎はまた勢いよく燃え上がり道をふさいだ。周りは炎の海、もう引くことも出来ない。まあ退路は元よりなく、ただ進むだけなので、それで構わない。

「いいえ、気にすることはないわ」

「それで君のことは何て呼べばいいんだ？」

最後まで竜の魔女じゃ、味気ないだろ？ と笑いかければ、

「そうね、昔のままだとあの聖女と被ってしまふから……オルタ。うん、私はジャンヌ・ダルクオルタ。オルタとでも呼んでちょうだい」

「そうか、じゃあオルタと呼ばせて貰うよ」

「ええ、そうしてちょうだい。まあ、短い間だろうけど」

そう言っつてオルタは漆黒の旗をもつ手の力を強めた。

「貴方はやつぱり、ここに立つのね」

「ああ、だからあの時言っただじゃないか」

黒く染まった彼女と初めて会った日。

——そういうことだから、私達は一度引くわ。私はアナタがこちらについてくれるならいつでも大歓迎だから……でも、もしも、気持ちが変わらないようであれば、次からは、私とアナタは……。

——ああ、そうだな——敵同士だ。

そうあの時からこうなることがきつと決まっていた。

「貴方は私の前に立つことの意味が本当に分かっているの？」

——本当にそれでいいの？

彼女の瞳はそう語る。

「ああ、もちろん」

その瞳に——是と力強く返す。

「本当に！ 本当に分かっているの！」

傍から見ても分かるくらい手に力を込めながらオルタは叫ぶ。その声は辺りから聞こえる燃え盛る炎の声を乗り越え部屋中に響き渡った。

「ああ、分かっているよ」

吐き捨てるようにそう言いながら言葉を紡ぐ。これまで聞いた話と、これまで見て来たことと、そして俺自身のことを組み合わせて出した答えを吐き出す。

——さあ、いい加減答え合わせと行こうか。

オルレアン最終決戦最終戦 悪魔の軍 隊長VS 竜の魔女ジャ

ンヌ・ダルクオルタ 開戦
終焉はもう既に目の前にある。

最終話

——本当に貴方は分かっているの？

「ああ、分かっているよ」

吐き捨てるようにそう言い放ち、そして息を一つ大きく吸い込み吐き出す。

「なんで聖女だったキミがそのように黒く染まったのか、その答えは情報さえ集まればすぐに出た」

初めて竜の魔女にあつた時に感じたこと。そして、その時の問答。

『そうか……では、そのフランスを滅ぼすという行為は君自身だけの為か？』

『——ええ』

——彼女の瞳は……。

そう、あの時の彼女の瞳には明らかに揺らいでいた。

「初めてあつた時の問答でキミが自分のためだけではなく、フランスを滅ぼそうとしていると言うことは分かった。そして、その前の戦闘で俺が異常な身体能力の増加をしていることも分かっていた」

あの日はその問答以外に竜と戦ったり、そしてシュヴァリエ・デオと剣を合わせたりしていた。どちらの戦闘でも俺の異常なほどの力の上昇があることが分かった。

「でも、その時は自分自身の異常な力の事についても、そして何で君がフランスと言う国を滅ぼそうしているのかも分からなかった。でも全ての答えは単純な話だったんだ」

そこまで話すと、額から流れる血と汗をまだ無事な右手の裾で拭う。

——ああ、これは結構やばいな。

血を流し過ぎたのと、低酸素の状況が相まって、結構しんどい状況だった。まだ立っているだけで動きがないからいいものの戦闘でもしようものならすぐに意識を失いかねない状況だ。

それでも、ここで話を止める訳にはいかない。全ての終わりなんだ、少しくらい体の方に無理を通して貰おう。

「疑問を抱えたままの俺に偶然とはいえ、情報が入ることになる。そう、カルデアのマスターとの出会いだ。彼女と出会い、そして彼女から聞かせて貰った情報によって大きくこの答えへと近づく」

人類の希望であり、人類最後のマスターの藤丸立香。彼女に出会ったあの日、彼女から色々な話を聞くことが出来た。

聖杯について、サーヴァントについて、マスターについて、魔術について、カルデアについて、人理について、未来の地球が亡びることについて、レイシフトについて、そして、特異点について……。

そんな色々なことを彼女から聞いた。

「いろいろなことを立香から聞いたけど、それでも分からないことがあった。まずは俺自身の状況とそして部下たちの状況だ。そして、俺自身の存在がどんな物だったか分かった時、全ての答えが連鎖的に出た。俺自身は初めの方は、自分のことを周りから言われるように不完全なサーヴァントだと思っていた。でも、それは少しだけ違ったんだ」

「……………」

ゆつくりと話す俺をジャンヌはただただ黙って見つめており、口を開かない。まだ、彼女は言うべき言葉を持っていないみたいだ。

「不完全なサーヴァント、例えば、デミ・サーヴァントであるマシユもそうだし、ジャンヌもそうだ。彼女たちは不完全なサーヴァントだけど、俺のように力の上下がない。そりやそうだ、いくら不完全なサーヴァントとして召喚されたからとは言え、力の最高値が上下するなんて普通のサーヴァントじゃ有り得ないからな。では、何でその力の増減が起きているのか……」

「答えは初めて会った時の君のセリフと、そしてどういう時に力が増して、どういう時に力が減るのかを考えれば簡単に出たよ」

俺と初めてあった時オルタは小さく漏らした。

『まさか、今更あなたが召喚されるなんて……。いえ、寧ろここまでなったから召喚されたのかしら……?』

今更という言葉とそして、寧ろここまでなったから召喚された、という言葉。

そして、俺の力の増減は竜や竜骨兵などを倒した時に減り、逆に何もしないと増えるようだった。

「君はあの時に、寧ろここまでなったから召喚されたのかしら、と呟いた。そして、俺自身の力の上限は敵を倒す、即ち君の仲間を倒すと減って、何もしないと増える。俺たちが敵を倒すとどうなるか？ 答えは簡単、フランスが滅亡から一步遠のく。では逆に俺たちが何もしないとすることはどういうことか？ それは、要するにフランスの滅亡を一步早めることになる」

「もうここまで来れば答えまで直ぐだ。俺が召喚された理由はフランスが減びそうになって召喚されるほどの力を得たからだ。召喚されるほどの力を得る。それは即ち、サーヴァント化したと言うこと。死んだ人間が甦る道理はない。俺はサーヴァントだった。でも、俺には座からの知識も無ければ、英霊として不安定だった。そりやそうだな——」

「——だって、俺は英霊になれるはずはないんだから」

立香は言った。サーヴァントとは英霊であり、英雄だと。

俺のようなただの人間にはなれる筈もないもの。そして、もしも万が一俺がその器でもなることが成れる筈のないもの。

「もう君は知っているんだろう。——俺が未来から来た人間だということ！ そう俺が英霊になれない理由は単純だ。本当はこの時代にいてはいけない人間だからだ。時代に名を残すことは俺にはできない」

「でも、何の因果か俺は歴史に名を残すことになってしまった。歴史を変えてしまった」

あの終わりの時を思い出す。本来なら聖女は一人で処刑されるはずだった。しかし、実際には俺がいた。聖女の純潔を守るために命を懸けてそして、聖女の師として共に処刑された俺が居た。

「さあ、答え合わせと行こうか。——消えるんだろ？ 全て。俺が居たという証拠が、記憶が、証明が。この時代の全てから俺が消えるということだろ」

——世界は間違いを許さない。

ある冬の教会で考えた言葉がよみがえった。そう、きつとそういうことだ。

世界は間違いを許さない。

「そう考えれば君のフランスを滅ぼそうとすることの意味が分かる。世界の滅亡の原因は、特異点は君ではない。——それは俺だ。俺自身の存在が、歴史を変えてしまった俺の存在その物が特異点だ」

特異点とは何か、そんなもの考えるまでもなかった。この世界におけるイレギュラーは竜の魔女の前に存在した。俺がこの時代にやって来たそのこと自体だ。

彼女が世界を滅ぼす理由は俺という特異点を守るため。

分かっていた。彼女が自分のためじゃないとするならば俺のために行動する人間だということは。

「この世界が滅びれば、世界は俺を修正する必要はなくなる。でも、世界が未来へと向かうなら、その修正力ですべて元に戻る。そう、俺は中世フランスから消え去り、時代は決められたレール通りに進む。そして、俺は未来へと帰る。全ては元に戻るんだ」

このまま世界が滅びれば、俺の伝承も消えることがなくなり俺はサーヴァントとなる。しかし、世界が未来へと進み俺の存在そのものがこの時代から消え去れば俺はサーヴァントではなくただの人間に戻る。

敵を倒せば俺は人間に近づき、敵がフランスを滅ぼせば俺はサーヴァントに近づく。

俺の力の増減の理由はそんな単純なことだった。ましてや、この時代は俺が死んで間もない時だ、伝承も知名度も最高潮の時の物、その力は聖女にも匹敵する物があってもおかしくはない。

部下たちもそんな俺の影響を受けて神秘の力を得たのだろう。寧ろこの時代に本来いる彼らの方がその力は安定している。

「どうして、どうしてそこまで分かっているのに、貴方は笑っているの!？」

それまで黙っていたオルタが口を開いた。その言葉には前のような憎悪の音は聞こえず、ただ困惑の音だけが聞こえた。

「——私は悔しい！ 私は許せない！ だから、世界を滅ぼしてやろうと思った！ 世界は間違っている！ なんて貴方がそんな目に！ あの終わりには納得してた！ でも、でも、世界は貴方を裏切った！ 消し去った！ だから……！」

「だからといって世界を滅ぼすのかい？」

「ええ！ 全ての人の記憶から貴方が消えると言うならそんな世界滅びた方がましよー！」

「でも、君はそれが間違っていると分かっているよな」

「——何を言っているの!？」

「だって、聖女を召喚したのは君だろう」

「——なっ!？」

ずっと疑問に思っていた。何故、竜の魔女は黒く染まったと言うのに聖女は聖女のまま召喚されたのか……。

「ジャンヌダルクはジャンヌダルクのままだった。それはきっと記憶がなかったからだ。座についてからの記憶がない。彼女も俺と同じく、死んだ後の記憶がない。座というものに入れない俺とは違ってジャンヌダルクは聖女として正式に歴史に名を刻んだ英雄だ。本来なら記憶がないこと自体がおかしい」

「でも、こう考えれば納得する。ジャンヌダルクが座から知識を受け取ると竜の魔女が変わると……。座から知識を受け取ると自分が死んだ後の世界についても知れることになる。そうになると、不味い。だから、座からのバックアップ受ける前の状態で召喚するしかない。そして、それが出来るのは聖女自身」

「彼女を召喚した理由は……そうだな、世界を滅ぼそうとする自分と敵対して止めてほしかった。聖女のままなら間違いなく竜の魔女を止めるだろうし」

竜の魔女がその良心で呼んだのがジャンヌダルクと言う聖女だったのだろう。

「お見事な推理ね……でも、少しだけ違うわ。——彼女を召喚した理由は試したかったのよ。どちらの思いが強いか。私がこの世界を滅ぼしたい気持ちは本当。そして聖女がこの世界を救いたい気持ちも

本当。だから、どちらの気持ちが強いか試してみたの。でも、結果はご覧の通りよ。聖女様は私に傷一つつけることが出来なかった」

「だから、この戦いは私の勝ちよ。後はカルデアのマスターの息の根を止めれば全てのサーヴァントが消える。それでこのフランスはお終い」

オルタは薄く笑いながら腰に提げていた短剣を抜く。

「まだ、その前に俺がいるんだが？」

「今にも倒れそうなほどにボロボロの貴方に何が出来るの？ 大人しく部屋の隅の方でフランスの滅亡を見届けなさい。私と戦っても今の貴方じゃ逆立ちしたって勝てないわよ」

勝てないか……。そうだな、普通なら勝てないよな。

「確かに今の俺では君に逆立ちしたって勝てない。まあ、そもそも何時だって俺に勝利はないんだけどさ。まあ、それは今は置いておこう。——勝てないから、全てをひっくり返させて貰うよ」

どうせ俺が居たと言う事実がなくなるのなら、〃不死不殺〃という俺自身を現す伝承がなくなるのなら、最後に俺自身の手でこの伝承を終わらそうと思う。

右手に持つ西洋剣の剣先を自らに向ける。

「どういふつもり……」

「俺の伝承は知っているだろう？ ただ戦場で死ななかつただけの俺だけど、二つ名のようなもんを頂くことができた」

「〃不死不殺〃でしょ？ もちろん知っているわ。そして、その伝承そのものが昇華したのが貴方のその剣であり、宝具であることも……」

「そこまで分かっているなら話は早い。この伝承は半ば呪いのような物だね。俺は、戦いにて、自分が死なない代わりに相手も殺せないようになっっている」

辺りは憎悪の炎に包まれ、酸素も薄い。サーヴァントになったからどうにか意識はもってはいいるが、生身の人間だったのなら、間違いなく死んでいるだろう。その辺りは彼女の方も分かっているのか。妙な手加減がされてある。

しかし、サーヴァント化したとは言え、酸素がなければ、生きてはいけない。それに俺は元々半ば半分人間のような中途半端なサーヴァントだ。しかも、それは昔の話で今の俺は既に普通の人間と半ば大差がなくなっている。それに血だって大分足りていない。そんな俺にとってはこの状況は大分しんどい。

死ぬことはもう暫くないとしても、意識の方はもって、後数分。ジャンヌと打ち合う羽目になれば、その時間も大幅に短くなる可能性も高い。

でも、その数分有れば十分だ。

「言葉や概念と言うものは、結構簡単にひっくり返ってね。例えばこの剣の場合はこうだ。自らにその剣先を向けるだけで、その属性は反転する」

「何が言いたいのか？」

「これを使えば、伝承を裏切ることになる。俺と言う存在の否定になる。でも、最期の終わりには相応しいと思うんだ。——言っただろ、全てをひっくり返すって」

前の話は見知らぬ人百人が乗った船と、知り合いが十人乗った船のどちらを助けるかと言う話だった。でも今回はその、見知らぬ人が百人乗った船と、十人の知り合いの乗った船の話ではない。

この話のもっと大きく、難しい話だった。

選ぶ人間とその特定の一人を除いた全世界の人が乗っている船と、愛する人が一人だけ乗った船、そのどちらを救うのか、という話だった。

ジャンヌオルタはその一人の愛する人を救う。

では、俺はどうか？

きつと、俺は最後までウジウジと悩んだ挙句、その愛する一人を見殺しにして——きつと自らも死ぬ道を選ぶ。

「『不死不殺』と言うのは、自らも死なない代わりに相手も殺さないと言うことだ。つまり、逆を返せば、俺が死を選べば、相手も確実に殺せる。行為をひっくり返すということは、その結果もひっくり返る

——“不死不殺”の反対、それは“必死必殺”となる」

そう、これがこの宝具の本当の使い方であり、たった一度の使い方……。俺が自ら必死を選べば、相手にとっての必殺になる。しかし、それは俺が自ら自分自身の存在価値である、伝承を否定することになる。“不死”を否定し“不殺”を否定する。故に、この使い方をすれば、俺はもう二度とこの宝具を使うことは出来なくなる。

——まあ、全てが終わるのなら……。全てがなくなるのなら、この終わり方こそ相応しい。

勝利の反対が敗北ならば、引き分けの反対は引き分けになる。

結局俺は戦場にて一度も勝てずに、負けもしない。でも、同じ引き分けでも、自分も相手も生き残る引き分けと、自分と相手が両方死ぬ、引き分けがある。

今までは前者の引き分けを選び、今回は後者の引き分けを選ぶだけだ。

「——なっ!?!」

ジャンヌも気付いたようだが、もう遅い。

この宝具は詠唱も読唱も必要としない。自らの剣先を自らに向けてだけで発動する。それが発動のキーだ。

剣が光を帯び始める。それと同時に使用者である俺と対象者であるジャンヌの体も淡い光を帯びる。

「ハアアー!」

ジャンヌが黒剣を操り、西洋剣を俺の手から弾こうとするがもう遅い。崩壊は既に始まり、それを止める手段はない。

——“必死必殺”

たった一度、俺にしか使えない宝具は文字通り相手と自分を殺す宝具。

そこには因果の逆転も、過程も何も無い。——ただ、死んで殺したという“結果”だけを生む。

「さて、ジャンヌこれで終わりだ」

——パリン。

そんな甲高いガラスが割れるような音を立てて、西洋剣の刀身がま

るでその役目を終えたかのように砕け散る。

全てはもう終わった。俺たちを包む光は徐々に光の粒になり、空へと昇っていく。それは魔力と呼ばれる物であり、魂と呼ばれるものだ。

「……………」

ジャンヌは何も言わずに此方を見る。賢い彼女の事だ。もう、何をやっても無駄なことを悟っているだろう。

力が抜けたかのように、ジャンヌの手から漆黒の旗が地面へと落ちる。

「アナタはこれでいいの?」

そして、ジャンヌはよろよろと力ない動きで此方にフラフラと近づく。

「ああ、これでいいよ」

悔しくないと言えば嘘になる。虚しくないと言えば嘘になる。泣き叫びたくないと言えば嘘になる。

——悔しい、虚しい、泣き叫びたい。

「ほ、本当に…………?」

世界はいつだってこんなはずじゃなかったことばかりだ。

世界はいつだって優しくない。

それが世界だ。

でも、俺はそんな世界で生きて、そして、死ぬ。

世界は美しくないが故に美しく、世界は優しくないが故に面白い。

理不尽に囲まれ、選べるはずの選択肢が選べず、生きていてほしい人から死んでいく。

でも、俺はそんな世界が好きだった。

「ああ…………」

俺たちから出る光の粒はどんどんその量を増やし、空へと昇っていく。残された時間は幾らだろうか。

「何もかもが無くなってしまふのよ! アナタが生きた証も何も!

この時代の全ての人の記憶から、世界の記憶からなくなるのよ! 本当に貴方はそれで…………」

力が抜けたようにこちらに倒れ込んで来るジャンヌを抱きかかえるように支える。剣は既にそこらに投げ捨ててある。あの剣にはもう何の伝承も神秘も宿っていない。すでにその役目を終えた。

もしかしたら、数ある並行世界の中には俺とジャンヌがともに英霊になれた世界もあるかもしれない。でも、それはこの世界ではないようだ。

「ああ……。ただ、世界が元に戻るだけだ。ただ、それだけだ」

「そう、私は悔しい。世界が許せない。こんな世界滅ぼしてしまいたい。でも——」

何時の日かドンレミの村で幼い日のジャンヌに聞かれたことがある。

『愛の理想とは何か？』

何でそんな質問が出たのか、今では覚えていないが、俺が何と返したかだけは、しっかりと覚えている。

「——貴方がそれでいいなら、それでいい」

——君がそれでいいならそれでいい”。

愛の理想はきつと、ここにあると、俺は今でも思っている。

「そうか、それなら良かった」

光はドンドンと強くなる。体から流失する粒子はその勢いを増す。既にもう下半身の感覚はない。

光が全てなくなった時が俺と彼女の終わりだ。特異点を取り除かれた世界は修正力で元に戻り、彼女は聖女として英霊の座に帰る。そして、俺は未来へと帰る。

あつたものが元の場所に返るだけだ。ただ、それだけ……。

「私、忘れないから……」

腕の中のジャンヌがか細い声をだす。その声は震えていた。

「例えば世界中の誰が忘れても、私は忘れないから……」

「そうか、それは良かった。キミに忘れられると俺も堪える」

——この世界に来たことに意味はあつたのか？

その何時もの問いかけに今なら胸を張って答えられる。

——意味はあつた。確かに意味はあつたんだ。

「うん、絶対に絶対に忘れない。忘れてなるものですか、だって貴方は」

——私が唯一、愛した人だから。

その目には涙が浮かんでいた。

——なんだ、結局泣き虫の癖は治らないのな。

どちらでもなく顔が近づく。

唇が触れ合うだけのキスを一つ。

「それじゃあ、ジャンヌ。また、会おう」

「ええ、また会おうね。お兄ちゃん」

視界が白く染まった。

オルレアン 最終決戦 最終戦 悪魔の軍 隊長VS 竜の魔女
ジャンヌ・ダルクオルタ 両者戦闘不能により引き分け。

——目がつくとそこは夜だった。

目の前には街灯に照らされたコンクリート道路に明かりが灯ったビル群の光。

生ぬるい夜風が髪を撫でる。通り過ぎる人々が話す言葉は日本語。

——ああ、戻って来たんだ。

その言葉が浮かんできた。右手に重さを感じると思い、見て見ればコンビニのビニール袋。中にはブラックコーヒー。

試しに左腕を見てみる。風穴が開いたはずの二の腕は傷一つなかった。それに体中の火傷もない。どうやら全て元通りになっていた。

るらしかった。

——あれは夢だったのだろうか。

いや、そんな筈はないと否定する。痛みも熱さも苦しきも、楽しきも、嬉しきも、あの笑顔も全て覚えている。これが夢だった筈はない。

「あれ、先輩？　こんな所でどうしたんですか？」

そんな時だったふと声を掛けられた。

「ああ、シロウ君か……」

声の方を向けば見知った顔が一人。

俺が今までどうしてたのか……。

それを一言で表すなら、言葉はきつとこれしかない。

「——最高の美少女に恋をしてきて、ちよつと世界を救っていた」

「はい？　何言っているんです？　それに先輩泣いてませんか？」

『夜のラジオニュースをお伝えします。フランスにて百年戦争終結頃の物と思われる旗が発見されました。その旗には不気味な悪魔のよ
うな物の刺繍とフランス語で「隊長、我々は確かに地獄でお待ちして
おります」と書かれています。専門家は、当時の悪魔崇拝者た
ちの遺品ではないかと………』

どこからか流れて来たそのラジオの音声は俺の耳に入ることがつ
いになかった。

こうしてここに確かにあった物語が一つ終わった。

「問いましょう、貴方が私のマスターですか？」

「——言っただろう約束は守るって」

「——ぐすつ、うん、お兄ちゃん！」

—
F
i
n